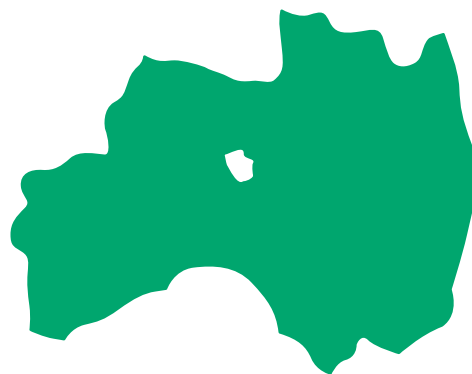




平成28年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業

活動成果 報告書

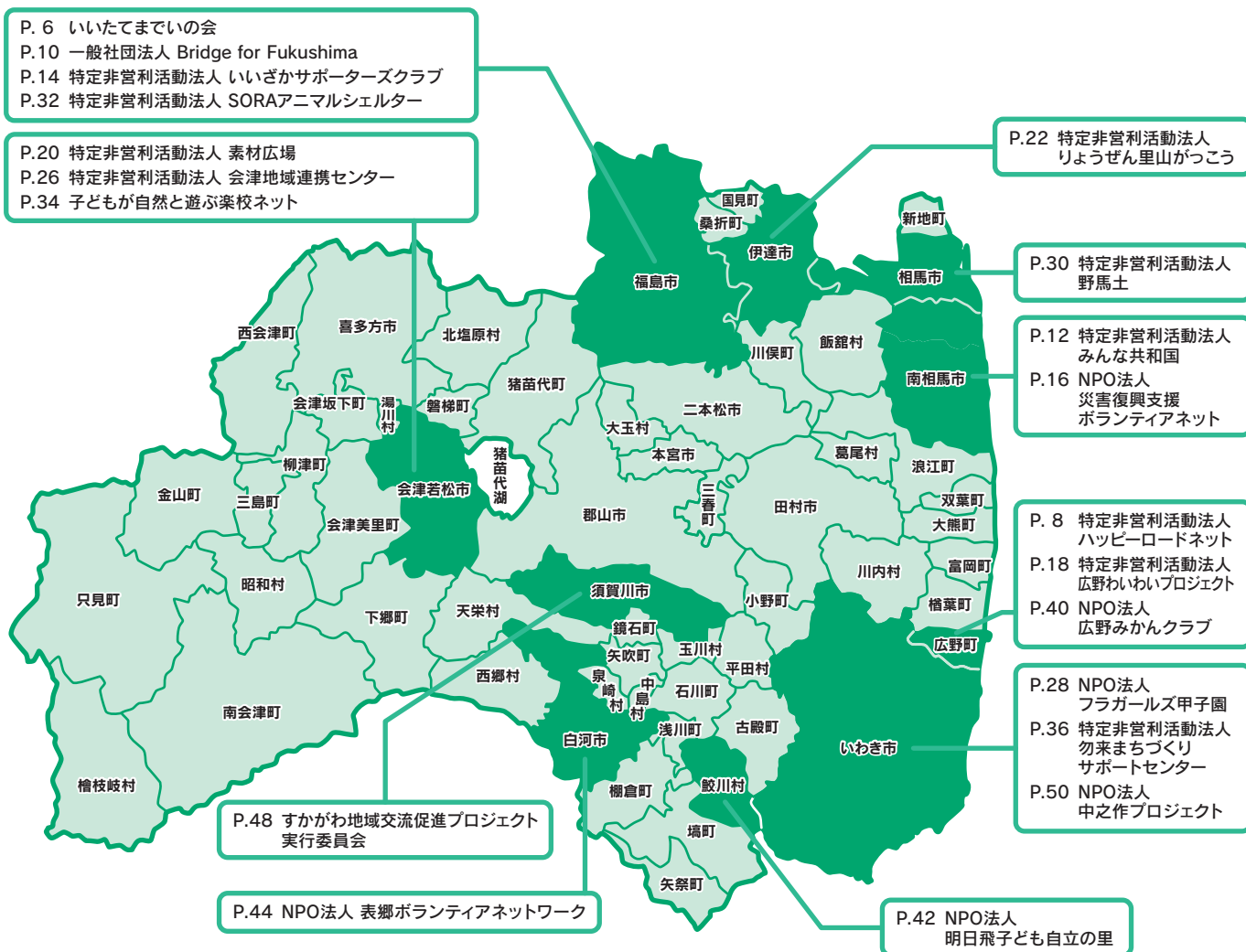


多くの県内外の団体の皆さまから
ご支援いただきました。
ご協力ありがとうございました。



沖縄

本事業の採択団体の所在地を表示しております



ふるさと・きずな維持・再生支援事業について「ふくしま復興ステーション」からご覧いただけます。

ふくしま復興ステーション ～復興情報ポータルサイト～

「ふくしま復興ステーション」は、ふくしま復興の現状と取組を“見つけやすく” “分かりやすい”形で世界に発信する福島県公式復興情報ポータルサイトです。



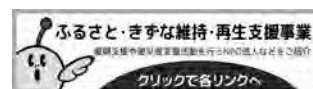
【福島県】 <http://www.pref.fukushima.lg.jp/>

▶福島県ホームページよりバナーをクリック!

【ふくしま地域活動団体サポートセンター】 <http://f-saposen.jp/>

▶トップページの「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」バナーをクリックすると項目が表示されます。

各年度の採択団体の事業内容、活動のようすなどをご覧いただけます。



はじめに



東日本大震災から6年が経過しましたが、福島県では現在も約8万人の方々が避難生活を続けており、生活再建における不安の払拭、地域コミュニティの維持・再生、さらには原子力災害による根強い風評、時間の経過に伴う風化など、様々な課題が山積しております。

このため県では、内閣府の「NPO等の「絆力(きずなりよく)」を活かした復興・被災者支援事業交付金」を活用して、東日本大震災及びそれに引き続く原子力災害からの復興等に向けNPO法人等が

行う復興支援や風評被害対策等の取組を支援するため「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」を実施しております。

この事業により、被災者・避難者の交流サポートや心と体のケア、帰還支援、風評被害の払拭、復興まちづくりなど、NPO法人等が被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かした、きめ細かな支援活動を支援してまいりました。

本冊子は平成28年度「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」により、復興支援・風評被害対策等に取り組みされた23団体の活動実績及び成果についてまとめたものです。

今後、これらの活動が、本県を復興へと導く大きな力となり、NPO法人等をはじめ、行政や企業、地域住民等あらゆる関係者が一体となった取組が広がり、本県のきずなの維持・再生、そして、復興がさらに加速化されることを期待しています。

結びに、より多くの皆様にご覧いただき、関係者の皆様に、これからの地域活動、復興支援・被災者支援活動の参考としていただければ幸いです。

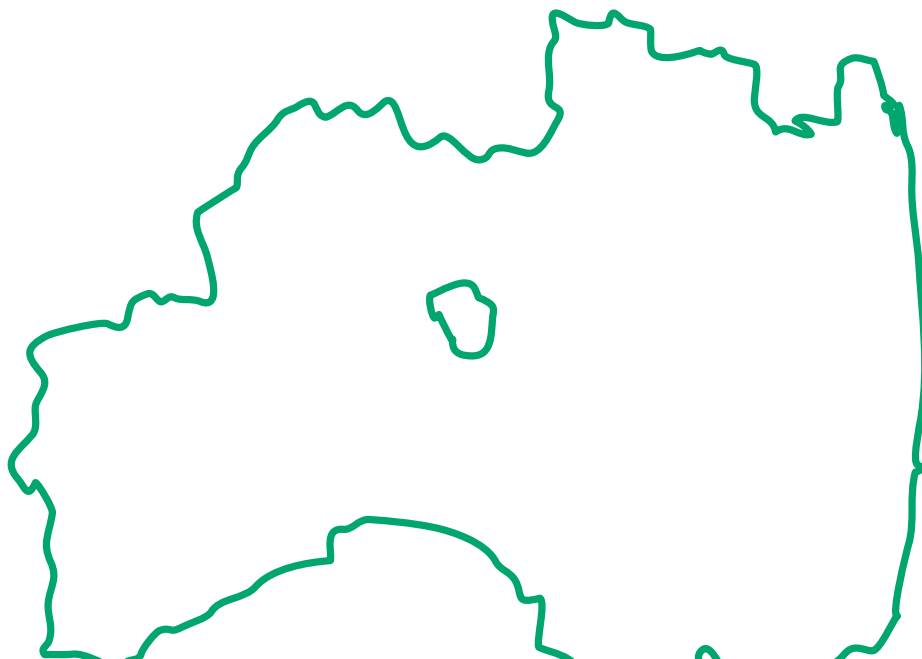
本事業の実施にあたり、御協力をいただきました関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、皆様のさらなる御活躍を祈念いたします。

福島県企画調整部
文化スポーツ局 文化振興課

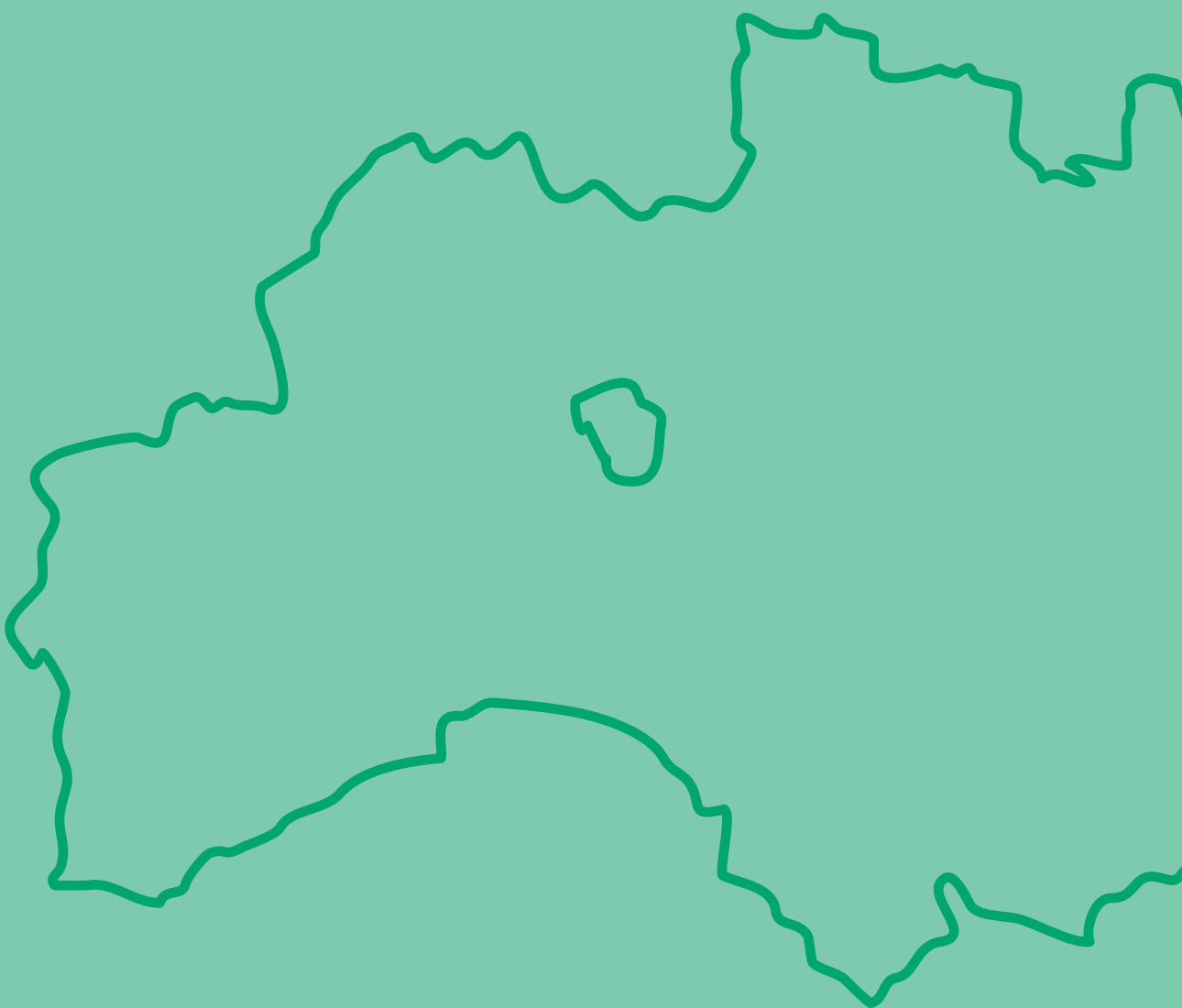
目次

ページ 番号	実施団体名
	事業名
P.6	いいたてまでの会
	いいたてミュージアムーまでの未来へ記憶と物語プロジェクトー2016
P.8	特定非営利活動法人 ハッピーロードネット
	ふくしま浜街道・桜プロジェクト
P.10	一般社団法人 Bridge for Fukushima
	データブックを活用した住民主体の街づくり事業@浪江
P.12	特定非営利活動法人 みんな共和国
	南相馬で放射線を気にせず前向きに子育てできる環境創り事業
P.14	特定非営利活動法人 いいざかサポーターズクラブ
	親子で考える農作物の風評被害と販売促進事業
P.16	NPO法人 災害復興支援ボランティアネット
	南相馬市を中心としてその周辺地域の復興支援事業
P.18	特定非営利活動法人 広野わいわいプロジェクト
	広野わいわいプロジェクト
P.20	特定非営利活動法人 素材広場
	料理人と生産者の魅力発信・福島食プロジェクト
P.22	特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう
	あそびを通して乳幼児の体と心の向上プロジェクト～自主性こそが命～
P.24	NPO法人 団塊のノーブレス・オブリージュ
	語り継ごう福島 請戸小学校を忘れない
P.26	特定非営利活動法人 会津地域連携センター
	クール会津・観光再生事業
P.28	NPO法人 フラガールズ甲子園
	フラガールのふるさといわき推進事業 第1弾「いわきフラウィーク」 第2弾「フラの道構想」 第3弾「全国学生フラ・フェスティバル」

P.30	特定非営利活動法人 野馬土 野馬土を拠点とした情報発信活動により風評被害を軽減し地域を活性化する事業
P.32	特定非営利活動法人 SORAアニマルシェルター ～動物と人の共生にむけて～東日本大震災・被災動物と人の絆醸成事業
P.34	子どもが自然と遊ぶ楽校ネット 子ども支援団体組織力強化を通じた野外活動プロジェクト
P.36	特定非営利活動法人 勿来まちづくりサポートセンター 津波被災を伝承するための記憶と記録整理保存事業
P.38	学校法人山口学園 ECC国際外語専門学校 復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」
P.40	NPO法人 広野みかんクラブ NPO法人広野みかんクラブ事業
P.42	NPO法人 明日飛子ども自立の里 被災により社会参加が困難な若者が牧場体験を通し、元気と意欲を取り戻し、畜産の担い手となる可能性を探る事業
P.44	NPO法人 表郷ボランティアネットワーク 被災地と首都圏を結ぶ復興応援事業
P.46	特定非営利活動法人 音楽療法NPOムジカトゥッティ 音楽療法による復興支援
P.48	すかがわ地域交流促進プロジェクト実行委員会 すかがわ地域交流促進プロジェクト
P.50	NPO法人 中之作プロジェクト 中之作地域 町並み保存活動
P.52	アンケート調査結果



活動団体紹介





いいたてまでの会

活動地域

福島市・飯舘村

活動分野

文化芸術スポーツ、その他

団体概要

〒960-8042 福島県福島市荒町4-7 県庁南再エネビル2F
TEL 070-5622-4982 FAX 024-572-6800
E-mail iiatemadei@gmail.com
URL <http://iitate-madei.jp/>

課題・背景

飯舘村は2017年4月に帰村、教育機関はその1年後に帰村が予定されているが、就学児童・生徒数は既に今年度から大幅な減少傾向にあり、コミュニティの分断、記憶の風化には拍車がかかる一方である。

目的

飯舘村の歴史や日常を記録し発信する本事業は村民のアイデンティティを維持するために不可欠であり、参加者が村の未来に希望を持ち、また、巡回展、勉強会として県内外に正しく発信することで飯舘村の現状への理解を広げ、福島県の風評被害の払拭に貢献することを目的とする。

取組内容・実績

取材

飯舘村、松川第一仮設、子育て支援センター、幼稚園等を訪問し、家族のこと、古いもの、大切なもの、思い出話をお聞かせいただき、そのお話に出てきたものをスタッフがいただき、「モノ」を収集した。2月末現在12名に取材、13点収集。3月に飯舘中学生から収集予定。



いいたてミュージアム展覧会

までの未来へ記憶と物語プロジェクト

会 期：2016年6月23日～30日 10：00～17：00

会 場：県庁南再エネビル3F

全70点を展示

いいたてミュージアム巡回展と講義 聖心女子大学

事業に共感いただいた聖心女子大学からの依頼により実現。巡回展初日には弊社代表が講義を行い、後日受講者約200名から感想レポートをいただいた。

巡回展：2016年6月13日～18日

講 義：2016年6月13日

会 場：聖心女子大学



取組内容・実績



いいたてミュージアム巡回展と勉強会 猪苗代町

「人のつながりから生まれる豊かさ」を大切に、様々な立場や考え方の人々が集える場所を目指して活動されているはじまりの美術館のご協力をいただきました。

巡回展：2016年11月23日～2017年1月9日
10：00～18：00

会場：はじまりの美術館

勉強会：2016年12月17日

テーマ：飯舘牛

～ブランド化までの道のりと未来

講師：JAふくしま未来そうま地区

営農経済部長

西 幸夫さん

いいたてミュージアム巡回展と勉強会 広島市

「広島に学ぶフクシマの伝え方」

原爆の記憶を伝え続けてきた広島で、いいたてミュージアムの未来と役割をみなさんとともに考えたいと、写真家でご自分のギャラリーをお持ちの石河さんにご協力いただきました。

巡回展：2017年2月14日～26日
11：00～19：00

会場：ギャラリー交差611（広島市）

勉強会：2017年2月13日 16：00～18：00

テーマ：広島・福島とミュージアムの力

講師：赤坂 憲雄（県立博物館長・学習院大学教授）

木下 直之（東京大学教授・文化資源学研究室）

木村 成代（ギャラリスト）

石河 真理（フォトグラファー）



事業の成果

- ・巡回展・勉強会で、飯舘村や福島県の現状の理解を深めてもらうことで、交流の拡大と風評被害の払拭に役立った。
- ・村民のコミュニティ維持に貢献できた。
- ・30代、40代の方々の取材を実施したことで、取材対象年齢層が広がった。

今後の展開

いいたてミュージアムの県外巡回展の拡大（九州・四国）と、帰村にあたり、展覧会を飯舘村で開催する。



ふくしま浜街道・桜プロジェクト

特定非営利活動法人 ハッピーロードネット

活動地域 浜通り地域

活動分野 まちづくり、観光振興、
子どもの健全育成

団体概要

〒979-0407 福島県双葉郡広野町広洋台二丁目1-5
TEL・FAX 0240-23-6172
E-mail office@happyroad.net
URL <http://happyroad.net/>

課題・背景

東日本大震災に伴う福島第一原発の事故により、双葉郡は避難指示区域が設定され、住民の方々は避難を余儀なくされている。

原発の風評被害が大きな課題であるが、桜を目的に集まる全国の方に浜通りの復興状況を視察してもらうことで正しい理解を得ることが重要と考える。

目的

高校生との協働により花の名所となる拠点づくりを行うなど、浜通り地方再生の機運向上、早期復興、また、地域再生の核となる人材を育成する。

避難住民や商工業者の浜通り地方再生への機運を高めるとともに、地域のNPO法人等による浜通り復興支援ネットワークを形成し、もって東日本大震災及び原子力災害からの復興再生を加速する。

取組内容・実績

全国からボランティアを募集し、国道6号・県道・町道等に桜等の植樹を実施。



勿来植樹風景

取組内容・実績



植樹箇所の除草作業・ごみ拾いなどを実施し綺麗な町、日々復興している町をアピールする。



立正大学ボランティア草刈

広野インターチェンジ付近において、双葉翔陽高校との協働により課外学習などの一環として、花の名所となるような拠点づくりを継続的に行う。今年は全国から訪れるお客様に高校生によるメッセージボードを設置し若者のふるさとへの思い、自分たちの歩みを発信。



双葉翔陽高校看板設置

事業の成果

桜等の植樹事業を実施することにより、浜通り地方再生への機運を高め、住民が夢と希望を持ち、健康で生き甲斐のある生活を取り戻すとともに、地域再生の核となる人材を育成している。

全国からの植樹ボランティアを募集することにより、全国に浜通り復興支援のネットワークが形成されている。また、植樹した桜が波及的に福島復興PR、風評被害払拭に寄与している。

今後の展開

毎年多くのボランティアの方々に参加いただき、平成24年度から平成28年度の5箇年で、約8,500本の植樹に達する予定。参加者からは今度は除草作業にも参加したいなどネットワークの輪が全国に広がっている。

リピーターとして桜見学を兼ねて観光で再訪して下さる方が増えているだけでなく、桜が「語りべ」の役割を担って、福島の復興状況を理解していただいている。

今後も浜通り地方再生の機運向上、早期復興の一助となるよう取り組みを続けたい。



データブックを活用した住民主体の街づくり事業@浪江

一般社団法人 Bridge for Fukushima

活動地域 福島県内全域

活動分野 社会教育、まちづくり、観光振興、国際協力

団体概要

〒960-8061 福島県福島市五月町2-22
TEL・FAX 024-503-9069
E-mail info@bridgeforfukushima.org
URL <http://bridgeforfukushima.org>

課題・背景

浪江町は、平成29年3月31日より帰還が開始されます。重要な課題が山積していますが、話し合いを行う上で必要な客観的情報が少ないため、行政と住民の対立を生んだり、住民から現実に即さない意見が多くなっているという課題があります。

目的

本事業は、浪江町の街づくりのため、社会的・経済のデータから政策を決定するEvidence Based Policy(データの根拠に基づく政策決定)の手法を用いて、データブックを作成し、住民が主体的に街づくりに参加できる機会を創ります。

取組内容・実績

浪江町のデータブック作成

浪江町出身の大学生を中心とした若者が、浪江町や町役場にとって必要な情報、現在不足している情報などを調査するとともに、町民の声を拾う調査を実施しました。

調査を踏まえ、人口、財政、復興の3項目を立てた第0版を作成しました。

データブックのさらなる充実のため、第0版を踏まえた浪江町民へのヒアリングと、「浪江を考える若者の合宿」を実施。データブックとして取り入れるべき指標や項目として取りまとめ、第1版を作成しました。



取組内容・実績

浪江を考える若者の合宿

データブック第0版作成後、データブックのさらなる充実のため、10～20年後の浪江町を担う若者（20歳前半）による合宿を実施しました。合宿では、浪江町の今後をどのような町にしていきたいか、若者による意見交換を行いました。意見としては、「地区ごとにコミュニティ同士のつながりが強かった」「自営業者が多く、町内で経済が完結していたイメージがある」「過去と現在のデータだけでは見づらいので、未来を知る推計を入れて欲しい」などが上がりました。

出てきた意見をデータブックに取り入れるべき指標や項目としてとりまとめ、第1版に反映させました。



データブック読み合わせ会(ワークショップ)の実施

本事業で作成したデータブックをもとに、福島県内外で浪江町の住民を対象とした小規模ワークショップを実施しました。将来の浪江を考えてもらうためであるとともに、住民の方が同じ情報を得ることで帰還後の街づくりの議論を客観的かつ具体的に進められるようなプラットフォーム創りに取り組みました。

事業の成果

浪江町出身の若者が本事業に関しており、データブックを用いて今後の街づくりに主体的に取り組むプラットフォームを提供しております。県内外において、ワークショップを実施し、将来の浪江町を考えるきっかけとともに、住民の方が同じ情報を得ることで帰還後の街づくりの議論を客観的かつ具体的に進める機会を提供することができました。

また、データブックの作成やワークショップの実施において、受益者である町民、また浪江町に関わりを持つ団体、教育機関とのネットワークを構築することができました。

今後は、飯舘データブックの作成など浪江町以外の地域での経験を生かし、他地域との比較を通じた展開を視野にいれております。

今後の展開

本事業で作成したデータブックをもとに、今後も継続的にワークショップを実施します。浪江町の街づくりは、これから長い期間をかけて実施していくものであり、将来の街づくりを考えるために、町の課題をデータとして住民が共有し、現実を理解した上で住民主体の街づくり、産業創りひいては政策提言を行うことのできるプラットフォーム創りを行っていきます。



南相馬で放射線を気にせず前向きに子育てできる環境創り事業

特定非営利活動法人 みんな共和国

活動地域 南相馬市

活動分野 子どもの健全育成

団体概要

〒975-0037 福島県南相馬市原町区北原境堀244-1
TEL・FAX 0244-32-1153
E-mail yotsuba-ho@hotmail.co.jp
URL <http://37cafepark.com/>

課題・背景

震災から5年が経過し、出生率も改善してきたが、未だ放射線への不安を抱えながら子育てをしており、子育ての悩み(特に乳幼児)を相談できる場所やそれを学ぶ機会がないことも大きな問題となっている。

子育て応援カフェ「37カフェ」が、地域の子育てママが子連れで集まって悩み等を解消したり、学んだりリラックスできる場所になってきた。チラシも毎月配布している為、認知度が上がってきている。

目的

子ども(特に乳幼児)や子どもを連れた親が気軽に集まり、子育ての悩み・不安の解消や親同士の交流、また各種ワークショップを開催し、遊びや学びの場を設けながら前向きに楽しく子育てできる環境を創ることを目的とする。

月に4~5回のワークショップを開催しており、親や子・親子の参加により親同士の交流や子ども同士の出会いの場となってきている。また、子ども支援に関わる団体やボランティアのつながる場にもなり、子育ての安心感が創られてきたと言える。

取組内容・実績

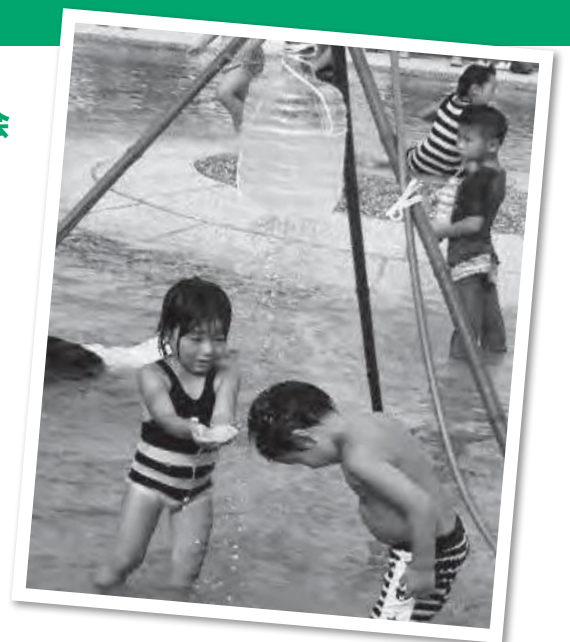
じゃぶじゃぶ池でペットボトルおもちゃをつくろう&おそうじ大会

日 時：平成28年8月21日(日)
13:00~

会 場：高見公園じゃぶじゃぶ池

参加人数：約50人

効 果：屋外でのびのびと安心して水遊びする場創り



取組内容・実績



丸林佐和子さんの工作ワークショップ 『おうち』を作ろう!

日 時：平成28年8月20日(土)
14:00～15:00

会 場：37cafe@park

参加人数：11組

効 果：親子で工作しながら楽しい時間を過ごす

LinaLina先生のウクレレワークショップ

日 時：平成28年10月5日(水)
18:30～19:30

会 場：37cafe@park

参加人数：大人10人／子ども2人

効 果：毎月継続して音楽にふれあい、
リラックス



※これ以外にも様々なワークショップを定期的で開催

事業の成果

屋内外で放射線を気にせず子連れで気軽に集まれる場創りを整備することで、特に乳幼児を連れた親たちが楽しく学び、悩みを解消でき、前向きに子育てできる場となってきた。

放射線や子育てへの不安が解消し、前向きに楽しく子育てできる場が増えることで、子どもを安心して産み育てることができる南相馬市というイメージが定着し、出生率アップにもつながってきている。もちろん、福島(南相馬)で子育てしてはいけない…という差別や偏見の解消にもつながってきた。

今後の展開

今後も屋内は子育て応援カフェ(37CAFE)にて、屋外は高見公園(じゃぶじゃぶ池)にて各種講座やワークショップを開催し続けることで、南相馬で子育てする安心感が積み上げられていくものと思われる。これからも認知度を上げていきながら、参加者を増やしていきたい。



親子で考える農作物の風評被害と販売促進事業

特定非営利活動法人 いざかサポーターズクラブ

活動地域 福島市

活動分野

まちづくり、観光振興、文化芸術スポーツ、
環境保全、経済活性化、職業能力雇用、
連絡助言援助、その他

団体概要

〒960-0201 福島県福島市飯坂町字湯沢26番地
TEL 024-529-6125 FAX 024-529-6126
E-mail info@iizakasupporters.com
URL <http://iizakasupporters.com/>

課題・背景

東日本大震災の原発事故により福島市内の農産物の販売が、風評被害の影響により低迷が続いている。

目的

- ① 福島市内の親子による、農業体験の様子や収穫した農作物を使ったレシピ・食事風景を、SNSやブログにて国内外に向けて発信することで、福島市で作られる農作物の安全性を知っていただき、消費拡大を図るとともに、福島市内の子ども達に農業について学んでもらう。
- ② 首都圏発着の「食と観光のバスツアー」にて、福島の親子や農業関係者と交流を深め、SNSでの発信をお願いすることで風評払拭を図る。
- ③ 農業体験などで連携した農家などと福島の産品を扱うカタログギフトの制作を目指す。

取組内容・実績

①親子de農業体験&クッキング

日 程：平成28年8月28日、9月25日、10月30日、11月26日、12月11日(全5回)

場 所：安斎果樹園、佐藤果樹園(福島市)、
りょうぜん里山がっこう(伊達市)

参加者：79名

内 容：小学生以下の親子を対象に農業体験と収穫した作物
での簡単な調理を行い、その様子をSNSで発信して
いただいた。



②ふくしまを知る 農業体験バスツアー

日 程：平成28年11月26日～27日

1日目：東京駅前発－安斎果樹園 農業体験－ふくしま30年プロ
ジェクト(放射線学習)－旅館清山

2日目：旅館清山－除染プラザ－福島駅東口マーケット－東京駅前

参加者：15名



取組内容・実績

内 容：安斎果樹園で福島在住者との交流をはかりながら、農業体験と調理を行ったほか、放射線に関する学習や農作物マーケットでの生産者との交流など、参加者に福島の実情を知ってもらい、その様子を発信していただいた。



③ふくしまの食材をつかった料理ワークショップ

日 程：平成29年2月5日、12日、3月5日(全3回)

場 所：福島市中央学習センター、福島駅前、アオウゼ

参加者：55名

内 容：福島駅前で農作物マーケットをてがけるGood Day Market実行委員会の協力で、福島の農産品を使った料理ワークショップを行い、その様子や作った料理を参加者がSNSなどで発信した。



④カタログギフト制作委員会

日 程：平成29年3月2日

場 所：福島市飯坂学習センター

参加者：福島市内の農家等、10名

内 容：長野県で地域の産品をカタログにして制作販売を行う(株)地元カンパニーを招いて、農業体験でお世話になった農家に集まっていたいただき、その取り組みについて具体的な説明やアドバイスを受けた。



事業の成果

- ・事業に合計159名の方が参加し、SNSでの発信をお願いしたことで、市民目線の口コミによる風評の払拭が期待され、特に小さい子どものいる親からの発信は、福島食材に不安を感じる若い世代の方にとって、素直に受け止められているのではと思われる。
- ・事業期間中に活動の案内や活動中の様子などFacebookへ28件投稿して、7500名以上の方が見ており、県内外の多くの方々へ福島の実情を発信することができた。
- ・農家、加工業者や飲食店などと連携することで繋がりができ、今後の取り組みについて情報を共有することができた。また、離農による休耕地の増加など、新たな課題を直接伺うことができた。

今後の展開

- ・(株)地元カンパニーの協力と、今回の事業をとおして繋がりのできた農家や加工業者などと、実際に福島産品を取り扱うカタログギフトを制作する。
- ・事業を通じて感じた市民目線の口コミによる風評の払拭や、放射能に対する正しい知識の普及などには、まだまだ先の長い活動が必要であるため、農家や地元企業、教育機関、学生などと連携して、学びと食と観光をテーマとしたモニターツアーやプログラムを構築し、市内はもちろん県内外に向けて発信していく。



南相馬市を中心としてその周辺地域の復興支援事業

NPO法人 災害復興支援ボランティアネット

活動地域 南相馬市内及びその周辺地域

活動分野 環境保全、災害救援、地域安全、
連絡助言援助

団体概要

〒979-2124 福島県南相馬市小高区本町2-57
TEL 0244-26-8934 FAX 0244-26-8935
E-mail rrmatumoto@yahoo.co.jp
URL <http://ameblo.jp/v-home-net/>

課題・背景

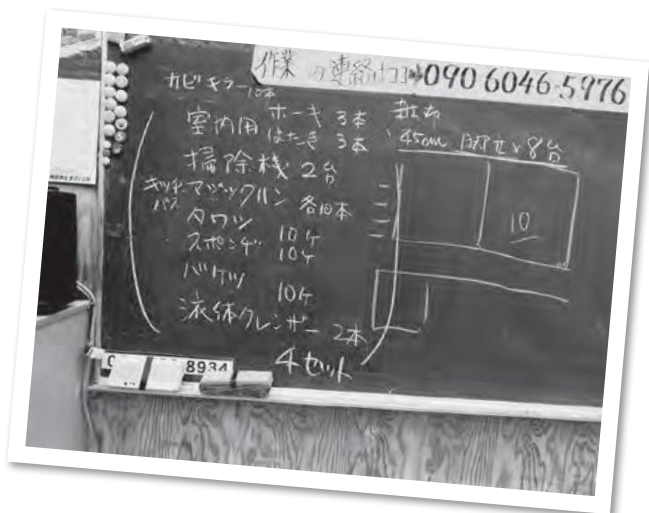
南相馬市内の帰還・移転希望者の引越し依頼、それに伴う屋内外の片付けや清掃作業が増えてきた。帰還者は震災前の人口の1割。年齢比は高齢者がその50%である為、屋敷林や家周りの草刈りなど今までのようには出来ない為多くのボランティアの力が必要とされる。

目的

震災前のようなコミュニティや、安心して暮らせる環境作りの為にも、地域住民の生活再建支援を目的としている。

取組内容・実績

- ・震災後手つかずだった家の片付け
- ・引越し手伝い



取組内容・実績

- ・活動前には全員で黙とう
- ・まだまだ依頼の多い側溝の泥だし



- ・屋敷周りの大木の伐採
- ・クレーンを使つての伐採作業



事業の成果

- ・今年度(2016年6月から2017年2月まで)のボランティア数は延べ5,977人。
- ・被災者から依頼を受けて活動した件数は、上記の期間で857件。
- ・依頼内容は地震・津波の後の家の片付け、清掃。引越し手伝い、集落の側溝の泥だし、屋敷林の樹木の伐採、剪定。パイプハウスや農作業用納屋・家畜小屋の撤去・解体。集落・屋敷周りの草刈り等あらゆるニーズに対応してきた。

今後の展開

今後も南相馬市とその周辺地域の被災者のニーズに応えるべく作業を行いながらも、ボランティアと地域の人達の交流の場を作る活動も行いたい。



広野わいわいプロジェクト

特定非営利活動法人 広野わいわいプロジェクト

活動地域 福島県広野町

活動分野 まちづくり、観光振興、経済活性化

団体概要

〒979-0403 福島県双葉郡広野町大字下浅見川字広長28-1
TEL 090-7328-2302
E-mail nemo-ken-took-1-7@coast.ocn.ne.jp
URL <https://www.facebook.com/hirono.waiwai.project/?fref=ts>

課題・背景

東日本大震災後広野町では全町民が一時避難した。その後避難解除があつたにも関わらず、帰還町民は半数程度に留まっている。廃炉と除染に携わる作業員との共存共栄を確立して、町に帰還を促進するため賑わいを創出する。そんな広野町に賑わいと生業(なりわい)をもたらすことを目指して、平成27年から活動を行っている。

目的

本事業は定期的なイベントの開催による賑わいづくり、首都圏住民との交流による継続的なつながりづくり、地元農産物を活用した商品開発の3つの取組を通じて、広野町の復興を目指す取組である。

取組内容・実績

①にぎわいづくり・「ひろのパークフェス」の開催

平成27年度から実施しているひろのパークフェスは、地域住民の憩いの場であった二ツ沼総合公園で手作り雑貨の販売、地域ミュージシャンによる演奏、大道芸など地域の若者や家族連れが楽しみ、交流できる場と憩いの場を再生するために、今年度は3回開催し、各回1,000人以上の来場者があつた。



見どころ：竹馬と遊ぼう！

表 ひろのパークフェスの実施概要

	第1回	第2回	第3回
日程	7/31(日)	9/25(日)	11/20(日)
来場者数	1,000人	1,200人	1,500人
店舗数	19店舗	16店舗	23店舗
出演組数	7組	5組	7組
見どころ	丸太押し相撲	竹馬と遊ぼう スポーツ鬼ごっこ	3on3ストリートボール大会

②交流促進・有機綿栽培と防災緑地の手入れボランティアバスツアーの開催

いわき市や首都圏の団体や企業と連携の上、地域外(主に首都圏)からの参加者を募集し、広野町内にあるオーガニックコットン栽培と都市公園の機能を有した、広野防災緑地の森づくりをメインとしたボランティアバスツアーを実施。町民と地域外の人々との交流を通じて、自然豊かな広野町の魅力の発掘と情報発信を行った。

取組内容・実績

表 ボランティアバスツアーの実施概要

	第1回	第2回	第3回
日 程	7/24(日)	11/6(日)	12/17(土)~18(日)
都内参加者	29人	36人	20人
行 程	コットン畑草刈り 昼食 防災緑地草刈り 温泉	コットン畑収穫 芋煮会 防災緑地手入れ 温泉	防災緑地草刈り 昼食 コットン畑収穫 ペイプづくり 交流会 公園整備 広野町周遊



コットン畑での活動風景



都内展示会にて「広野のお母さんのコットンペイプづくり体験」



広野町のマスコットのかご

③広野町の特産品開発

広野町の農作物など地域資源を活用した特産品の改善・開発を目的として、ふたば未来学園の生徒を交えたり、ワークショップを町内で3回開催し、具体的な商品案やパッケージについて検討を行った。また都内の展示会(オーガニックライフスタイル EXPO)に出展し、広野町の情報を発信した。



広野町の米粉を使ったビスコッティ試作品

事業の成果

- ・ イベント実施者として、工夫や配慮を行うべきポイントやノウハウが蓄積されてきた。
- ・ ひろのパークフェスが2年目に入り、地域の賑わい創りのイベントとして認知度も上がり、来場者及び出店者とも数が多くなってきた。
- ・ ボランティアバスツアーについては、リピーターとして継続参加下さる方が一定数おり、顔の見える関係づくりが進んでいる。
- ・ 第3回ボランティアバスツアーでは、「広野町の周遊」プログラムを取り入れたことで、今まで町外の人に知られていなかった町の魅力を発信できた。
- ・ ワークショップには、地域の高校生なども参加し、積極的な意見交換がされた。
- ・ 広野町のマスコットキャラクター「ひろぼー」をモチーフにしたかごや、広野の米粉を使ったビスコッティなど商品の開発が進んでいる。
- ・ はじめて都内の展示会に出展し、広野町の魅力を発信することができた。

今後の展開

- ① 来年度もひろのパークフェスの継続開催を目指し、広野町主催のイベントとの共催や、運営の連携強化を図ることで、継続的に地域の賑わい創りに貢献していく。
- ② 来年度も既に数件ボランティアツアーの開催を予定している。本事業での経験やツアー参加者の絆を大切に、交流の場を創り地域活性化に貢献していく。
- ③ これまでに開発できた商品を販売できるように検討を行うほか、まだ活用されていない広野町の資源(例みかんやブルーベリーなど)を活かした商品開発も検討したい。



特定非営利活動法人 素材広場

活動地域 福島県・首都圏

活動分野 観光振興

団体概要

〒965-0009 福島県会津若松市八角町13-45
TEL 0242-85-6571 FAX 0242-85-6572
E-mail info@sozaihiroba.net
URL <http://sozaihiroba.net/>

課題・背景

背景

福島原発災害により福島の食のイメージ低下を払拭できないでいるが、福島県産品の直接的被害に加え、食に直結している宿泊関係も、まだ震災前の入込に戻っていない。

課題

- ① 食の安全・情報発信
- ② 生産者の販売先の減少
- ③ 宿の集客力低下と地産地消の停滞

目的

生産者と宿の連携強化による地産地消の宿作り

- ・生産者の新しい販路の開拓
- ・地産地消に取り組む宿の県産利用促進と集客力アップ
- ・福島に泊まった人への食の理解促進への流れを作る
- ・首都圏で福島県産を使っている料理店との連携強化で風評被害対策の一助を担ってもらう

取組内容・実績

そざいひろばBOOKの発行

福島県内の宿に「地産地消プラン」を作ってもらいカタログを作成。また、福島素材を使っている首都圏のお店も取材しカタログに掲載することで、県産素材の利用促進を促した。カタログは県内外に配布し、情報発信をした。



取組内容・実績

鶏料理勉強会の開催

福島県内の生産現場を見てもらい、その素材を活かす講座を料理人向けに実施。川俣町農業振興公社で川俣シャモの生産現場を見学し、生産者との交流を深め、さらに老舗鶏料理店「玉ひで」の山田耕之亮氏による鶏料理教室を開催し、素材への理解を深めた。



ふくしま食材ライブキッチンの開催

首都圏の一般の方向けに、福島県出身の料理人である本田よう一氏による料理教室を実施（実施場所：日本橋ふくしま館MIDETTE）。8月～12月で毎月1回開催。毎回旬の福島県産素材を使用し、福島ファンを増やした。



事業の成果

- ・生産者と宿の交流が深まり、料理人をはじめ、宿スタッフの県産素材の知識が深まった。（＝宿の評価が上がる。）
- ・カタログ掲載店にお客様が来店した。
- ・9月～2月の期間で実施したプランで、生産者直送の素材を使ってもらった。

今後の展開

- ・全国から見ても楽しい企画を行っている宿は注目される。
- ・2017年(平成29年度)はさらに生産者と料理人のつながりを深め、新しい企画を行いたい。



あそびを通して乳幼児の体と心の向上プロジェクト ～自主性こそが命～

特定非営利活動法人 りょうせん里山がっこう

活動地域 伊達市

活動分野 子どもの健全育成

団体概要

〒960-0804 福島県伊達市霊山町大石字細倉17
TEL 024-587-1032 FAX 024-587-1082
E-mail info@date-satoyama.com
URL <http://www.date-satoyama.com>

課題・背景

震災後福島県内は、活発に体を動かす遊びや、自発的な運動の機会が減少し、体の操作が未熟な幼児、肥満傾向の児童が増えた。小さい頃から多種多様な遊びの経験の充実と習慣化が課題となる。

震災後、子どもを取り巻く環境が激変した。外遊びの減少、育児世代のストレス増加、危険を先回りしすぎる育児等、数多くの経験を必要とする子どもの遊びを減らしてきた。親子共々、体と心を開放するプログラムが必要である。

目的

乳幼児期からの遊びを通じた多種多様な動きの獲得と習慣化を目指す。

子どもだけでなく、それを見守る大人も、遊びを通して、心と体の健やかな育ちを養う場を設定する。

取組内容・実績

伊達市内の子育て支援センター5カ所、児童館2カ所、幼稚園、子ども園3カ所で親子遊びや運動遊びを実施した。親子遊びではふれ合いを中心としたスキンシップを多く取り入れた遊びを行った。また、昔から伝わるわらべ歌や絵本の読み聞かせや行事にともなった昔遊びや工作などの粗大運動をメインにしなが、手先を動かす遊びも取り入れた。親子遊びは、計70回750名程の参加。幼稚園などの運動遊びは、計14回280名程の参加があった。



取組内容・実績



親子遊びの中で、「心の教室」を開いた。大人と子どもで命について考える機会を作った。妊娠・出産のすばらしさ、生れてくることの偉大さ、食事は命の元という概念、虫や植物等の自然の偉大さ等、計25回500名程の参加があった。

「あそびのがっこう」を開催した。一流、プロと呼ばれる方を招いて、親子対象にあそびながら、音楽やスポーツ、木工等にふれてもらった。小さいうちは、理性が育っていないため、敬遠されがちなコンサートや楽器や専門道具に触れるなどを体験した。小さいからこそその5感を使った遊びは、学びの土台になる。計8回で160名程の参加になった。その中で、発達心理士を招き、子育てが楽しくなるような発達の話をしてもらい、育児へのストレス緩和に努めた。



事業の成果

育児をしている母や祖母の大変さを理解し、緩和する試みが出来た。遊び場を用意することで、子どもは思いっきり体を動かす楽しみを知り、大人は同じ育児仲間を作ることで、悩みの共有を図ることが出来た。1人で抱え込む育児が多い中で、こういった育児世代が集う意義は大きい。

震災後、特に外遊びを制限された影響は大きく、動きの未熟さや遊びの経験不足の大きなきっかけとなった。子どもの大好きな遊びをふくらます方法を見守る大人と一緒に考えてきたことは、これからの育児での大きな財産になると確信している。

今後の展開

子育てがしやすい環境を作るために、地域にも、地域の子どもと一緒に育てる意識を作っていきたい。親子遊びに地域の方を招き、一緒に遊び場を作ったり、地域の宝を共に共有したり、昔ながらの伝統的な遊びを教えてもらったり、と様々なイベントを企画したい。子どもが育てやすい環境づくりは、ひいては、地域に子育て世代を引き込む、地域を活性化する取り組みにつながっていくと思っている。



NPO法人 団塊のノーブレス・オブリージュ

活動地域 東京都(浪江町)

活動分野 社会教育、観光振興、災害救援

団体概要

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-4-14
ラウンジHello内
TEL 090-5798-8393
E-mail uchida@dankai.jp
URL http://dankai.jp

課題・背景

この事業は内容的には3年目と継続している。
3年前の3月津波の傷跡が生々しく残っていた請戸小学校を訪問した。その衝撃にも拘らず、子供達全員が無事避難出来た事を知り、この話を風化させてはならないとの思いで、1年目は絵本の制作、2年目は紙芝居上演を実施して来た。今年度はその映像化を目指し、請戸小学校での災害当日の出来事をより判りやすい形で提供するものである。



請戸小学校体育館の様子

目的

今年度の目的は映像化と紙芝居上演の二つである。

1) 映像化

映像化制作の目的は3.11震災時、請戸小学校で起こった事を出来る限り忠実に伝えるという事である。



映像化シナリオ脚本 ▶



2) 紙芝居上演

紙芝居上演は被災されている方々や子供達にこの物語にて、全員無事であった事を伝える事により、勇気と元気を持って頂きたい事及び福島以外の地域でも災害が何時来るか判らないので、その心の準備をして頂きたい事を目的としている。

◀ 町田市でのなみえ交流サロンにて

取組内容・実績

1) 請戸小学校物語映像化

映像化は以下の3部作構成である。

- ・ 請戸小学校物語 紙芝居上演風景
- ・ 先生と児童の証言
- ・ 請戸小学校 現在と過去の画集

‘紙芝居上演風景’は牧之原で上演され地元のメディアでも紹介されたものを収録した。

‘先生と児童の証言’は当時の避難の様子を関係者に思い起こして頂き、それを一つのビデオにまとめた。関係者のインタビューは先生方と児童で、インタビューは早稲田大学生である。

いわきのトラック運転手にもインタビューを実施した。またナレーションは声優の永田亮子さんに担当して頂いた。

‘現在と過去の画集’では震災前の風景を想定し絵により表現、同じ風景を震災後は写真により収録した。この映像もビデオ形式で制作した。



請戸小学校関係者へのインタビュー



震災前と震災後

取組内容・実績

2) 紙芝居上演

以下の7か所で紙芝居を上演した。

福島県内が5か所である。

平成28年 8月11日 りょうぜん里山がっこう

平成28年 9月10日 新宿駅前商店街

平成28年10月21日 福島大学

平成29年 1月19日 町田市なみえ交流サロン

平成29年 1月25日 伊達市立堰本小学校

平成29年 3月 4日 なみえ町3.11復興のつどい

平成29年 3月10日 福島市立庭坂小学校

なみえ復興のつどいでは地元小学生により、請戸の紙芝居と歌のコラボがあった。



伊達市立堰本小学校紙芝居上演



なみえ3.11復興のつどい紙芝居上演

3) 福島大学との連携

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター (FURE) と連携して、この請戸小学校の話をアーカイブ化する事を共に推進する事とした。

請戸小学校を震災遺構として残して頂きたいと考えており、こちらの想いを福島大学に共有して頂く予定である。

事業の成果

1. 若い方達が活動に共鳴してくれた事

早稲田大学の学生約10名と8月請戸小学校を訪問し、震災の姿を彼ら自身で感じてもらうと共に、その内の3名に参加頂きインタビューを担当して頂いた。

当時請戸小6年の2名がこの4月から大学生となり、紙芝居の語り部となり、この話を積極的に広げて行く事となった事。語り部の先生として浪江町の方をお願いする予定である。

2. 請戸小学校の先生方とのコミュニケーションが取れた事

校長先生をはじめ、避難に重要な役目を果たした先生方から再度、当時の様子をお聞きした。全員無事であった事は良い偶然にも見舞われた事を認識し、改めてご自分達の為された事の大切さを確認されていた。

3. 浪江町から避難されている方達への励ましとなった事

藤沢市や町田市周辺に避難されている方達に紙芝居を上演した。我々の事は絵本を通してよくご存知であったが、更に当時の様子などを相互で確認され、6年経過した事にあらためてご自身の境遇に感慨を抱いていらっしやう。

4. 小学校での上演

伊達市立堰本小学校を始めとして、福島市立庭坂小学校で上演を行った。

我々の絵本や紙芝居は小学5年生をターゲットとして制作しており、小学校という舞台上でそれを直接子供達に伝える事が出来る事は道徳、防災などの観点から絶大な効果があるのではと思っている。

5. 震災遺構としての着実な一歩

請戸小学校の震災遺構化は未定であるが、福島大学にも連携頂き、そのアーカイブ化を目指す第一歩の足跡を残せた。

今後の展開

1. 教育資料として整備する

この請戸小学校物語は結果として、全員無事避難する事が出来たという事実があるが、避難の場面に於いて、その時の判断が本当に正しかったのか等、自分ならどうするかという事などをテーマに、児童に考えて貰えるような資料を提供し、子供達に配布出来ればと考えている。

2. 請戸小学校震災遺構に向けた活動

福島大学との連携で、この請戸小学校を残す事が出来るなら、その時に小学校にて展示すべき絵本、紙芝居及び映像ビデオなどのソフトを充実させたい。

3. 全国及びワールドワイドに展開

福島県の浜通りの話と言う事ではなく、同じ環境/境遇の学校が全国に多く存在する。このような場所で大人や行政の出来る事は何か、人災を出来る限り除きたい事及びその準備をしてもなお自然災害がやって来た場合、どのような心積りをすれば良いのかなどの原資となるものを提供したい。



特定非営利活動法人 会津地域連携センター

活動地域 福島県会津地域

活動分野 まちづくり、観光振興

団体概要

〒965-0035 福島県会津若松市馬場町1-20 ヤマトメビル2F
TEL 0242-22-3633 FAX 0242-22-3644
E-mail aizu-renkei@bekonon.com
URL <http://www.bekonon.com/>

課題・背景

これまで会津を始め東北地方の多くでは、インバウンドの重要性は認識されつつも、具体的なインバウンド推進の取組が少なく、外国人観光客の数は他地域に比べあまり伸びていません。

そこで、外国人向け観光商品の造成、情報発信、受け入れ体制の整備といった具体的な取組の第一歩を会津で踏み出すことで、特に外国人観光客を対象とした観光振興を図り、震災以降まだ落ち込んでいる東北全体の観光を押し上げたいと思っています。

目的

風評被害により未だ落ち込んでいる会津の観光を再生することを目的とし、以下の3つの事業を実施しました。

- ①外国人向けの観光資源発掘とツアー商品の企画・造成
- ②ソーシャルメディアを活用したプロモーションの展開
- ③外国人対応の仕組みづくり

取組内容・実績

① 外国人向けの観光資源発掘と ツアー商品の企画・造成

地元関係者等によるワークショップや視察ツアーをそれぞれ2回開催し、この成果に基づきJTB東北に外国人向けツアー商品を造成していただきました。



取組内容・実績



② ソーシャルメディアを活用した プロモーションの展開

ミスワールド2016日本代表などに視察ツアーに参加していただき、インスタグラム、フェイスブックなどを通して情報発信をしていただきました。また、ワシントンDCで行われた世界大会においても、会津の民芸品を各国代表にプレゼントするなど、会津の情報発信に努めていただきました。

③ 外国人対応の仕組みづくり

英語、中国語、韓国語、日本語に対応した多言語対応音声ペンと音声ペン用多言語観光案内シートを制作し、観光案内所やまちなかの主要施設に設置しました。



事業の成果

- ・外国人向け(主に中国を対象)の旅行商品ができ、販売を開始することができた。
- ・発信力の高いミスジャパンに会津の魅力を広く発信していただくことができた。
- ・多言語対応音声ペンによるわかりやすく使いやすい外国人観光客向けの案内システムを導入することができた。
- ・ワークショップで、行政、観光事業者、飲食業、宿泊業、外部専門家など、セクションを超えた多くの方に参加していただき、会津のインバウンドについて議論することができ、インバウンドの推進についての共通認識を醸成することができた。今後は、これを契機に様々な主体が連携し、さらなるインバウンド推進に取り組むことができると考えている。

今後の展開

- ・ツアー商品や体験メニューのさらなる開発と販路開拓(越境ECなどでの販売)
- ・国外(中国やタイなど)及び国内(成田空港や浅草など)での販促キャンペーンの実施
- ・海外インフルエンサーの招致による会津の魅力発信
- ・多言語対応音声ペンの会津全域への範囲拡大
- ・タブレットを活用したシステムなど、より使いやすい外国人観光客に対する観光案内システムの開発



NPO法人 フラガールズ甲子園

活動地域 いわき市

活動分野 まちづくり

団体概要

〒970-8025 福島県いわき市南白土八ツ坂132-1
八ツ坂ビル2F
TEL・FAX 0246-68-8282
E-mail info@npo-hulagirls.org
URL <http://npo-hulagirls.org>

課題・背景

東日本大震災から6年が経過した現在、未だいわき市の観光交流人口が震災前の水準には至っていない状況下で引き続き、風評被害の払拭や交流人口の拡大が求められております。

目的

震災で沈みがちな市民感情を若い世代や全国の文化・人的交流を活性化させることで地元の持つフラ文化に対する誇りと未来に希望を持つ心の醸成につなげたい。

いわきを全国のフラ文化の拠点とすべく様々な事業を展開して全国からフラの愛好家が集い、市内はもとより市外からの交流人口の増加に寄与したい。

取組内容・実績

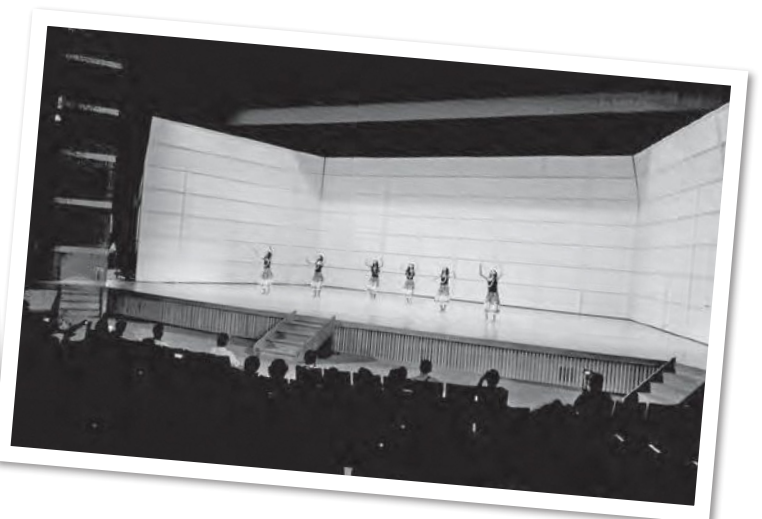
フラウィーク2016

2016年7月31日 いわき明星大学 講堂

フラガールズ甲子園プレ大会

参加校：あさか開成・石巻北・磐城一・小名浜・平商業・東日本昌平・湯本・好間・各高等学校＋
いわき明星大学

フラガールズ甲子園本大会前のPRイベントになりました。



取組内容・実績

フラウィーク2016

2016年8月11日 ヨークタウン谷川瀬店内
フラウィーク



フラの道構想(フラ祭り)

2017年2月5日 ラトブ
フラシンポジウム開催
フラガールズ甲子園出場地元高校生のフラ披露
第7回フラカールズ甲子園
大会開催の記者会見

第4回全国学生フラ・フェスティバル

2017年2月27日～28日
スパリゾートハワイアンズ
参加大学：11校



事業の成果

いわき市のフラ文化を県外各地へ伝達する機会を持たた。

1年間を通じたイベントを通して確実にいわき市民のフラに対する意識の醸成が出来ている。
(ふるさと愛)

高校生のフラの活動が教育の一環として大きな効果を上げている。

高等学校の新たな組織づくりに貢献。(全国高等学校フラ連盟の創設)

今後の展開

フラガールズ甲子園が地域経済に寄与できる体制づくり。

フラ祭りの精神と実践を全国へ広める。

いわきをフラの拠点とする事業を展開する。

フラ文化を通して福島県の移民歴史などを広く市民へ情報伝達しふるさと愛の精神を醸成する。



野馬土を拠点とした情報発信活動により風評被害を軽減し地域を活性化する事業

特定非営利活動法人 野馬土

活動地域 相馬市

活動分野

まちづくり、観光振興、農林漁村中山間、環境保全、災害救援、地域安全、国際協力、経済活性化、職業能力雇用、消費者保護、連絡助言援助

団体概要

〒976-0006 福島県相馬市石上字南白髭320
TEL 0244-26-8437 FAX 0244-26-8237
E-mail info_nomado@fork.ocn.ne.jp
URL <https://nomado.info>

課題・背景

3.11東京電力福島第一原発の被害により食や人に対して県外の人から風評被害が発生してしまったため、被災地の食に対しての不安や福島の内容について知ってもらい震災後のイメージの福島を変えていただきたい。

目的

震災から5年、被災地の食に対しまだまだ不安を感じている人が居る。野馬土は食品の放射能測定や福島第一原発付近を含めた被災地案内をすることで風評被害解消に向けた活動をしてきた。これまで活動してきたことを情報発信することで、全国に「安心・安全」を認識してもらい風評被害の解消を図りたい。

取組内容・実績

20km圏内ツアー(参加人数)

東京電力福島第一原発事故により住民の居住が制限され避難を余儀なくされている地域を実際に見て案内人の話を聞いて、現状を知るツアーを実施している。



取組内容・実績



東京東久留米 まるにえ祭り

まるにえ祭りは、東京都東久留米市で東日本大震災以降、被災地の復興支援として始まったイベントである。福島県人会という東久留米で福島を応援している方々の協力を得ながら、風評被害払拭のための広報活動を行った。

東京四ツ谷主婦会館産直市で広報活動

(アンケート回答数186件)

7月、10月、2月、3月と全4回浜通り供給センターと合同事業を行い特設ブースでの広報活動を行った。

これらでは野馬土の活動をまとめたパンフレットを配布することで読んだり聞いたりしてもらい野馬土がやっている活動を理解してもらおう広報活動を行った。



事業の成果

これらの事業を行ったことにより風評被害の払拭につながった。

又福島県への興味を引き出すことにより数多くの方が20km圏内ツアーに参加を希望してくれた。

6年前と比べ福島県の見方が変わりつつあり、食に関しては6年前より安全を確保できていることが目に見える形(全袋検査やNaIシンチレーション)で分かり、美味しく安全に食べることができるようになった。

全9回の広報活動のうち500件以上のアンケートが取れ皆様の意見を聞くことができた。

今後の展開

今後の予定では20km圏内ツアーを継続し、さらに多くの方に福島の実状を伝えることができればと考えている。

若者にも福島県を知っていただきたいので、若者向けに新たに事業を展開できればと考えている。



～動物と人の共生にむけて～東日本大震災・被災動物と人の絆醸成事業

特定非営利活動法人 SORAアニマルシェルター

活動地域

福島県内

活動分野

社会教育、まちづくり、
環境保全、災害救援

団体概要

〒960-2261 福島県福島市町庭坂字富山147-1
TEL・FAX 024-529-6267
E-mail kumazou0728@gmail.com
URL <http://sora.ne.jp>

課題・背景

避難指示後、現地の動物たちが被災動物となり避難区域内に残された。飼い主は行方不明や、生活環境が整わず一緒に暮らせない例が大部分だった。避難時に動物の受け入れ可能な指定避難所がなく、やむなく車中泊避難となる場合もあり、避難区域内では家畜による被害も出た。

目的

再び災害が起こった時に人と動物が安全・安心に生活できるよう、福島県の復興と「人と動物の絆」づくりを深める。

取組内容・実績

人と動物の共生をテーマにした勉強会

動物と人との関わりや、東日本大震災時の経験談等を交え動物と人間が共生できるにはをテーマにした勉強会を開催した。

- 第1回勉強会 「大和田新氏アニマルトークセッション」 講師／大和田新 氏
平成28年 8月30日(火) 参加者：72名
- 第2回勉強会 「ベ弁が動物問題を読み解く」 講師／細川敦史 氏
平成28年 9月21日(水) 参加者：51名
- 第3回勉強会 「ふくしま版・動物を殺すのは誰か」 講師／太田匡彦 氏 他
平成28年10月26日(水) 参加者：45名
- 第4回勉強会 「災害時でも一緒に暮らせるトレーニング法と使役犬(!?)のお話」
講師／後藤啓寿 氏 他
平成28年11月30日(水) 参加者：54名
- 第5回勉強会 「アニマルトークセッション・リベンジ!」
講師／大和田新 氏・杉本 彩 氏
平成29年 1月22日(日) 参加者：150名
- 第6回勉強会 「動物と人の共生 意見交換会」 講師／本多 明 氏
平成29年 3月 9日(木) 参加者：18名



結の場提供

人と人のつながりを大切に「結の場」として、シェルターを活用したボランティア同士の心の交流事業。ボランティアは県外からの来訪が多く、長期休暇には県内外の大学生も多く訪れる。滞在中は動物のことのみならず震災当時の生活や現在の福島の話をする機会がある。さらに、家へ帰ってから家族や友達へSORAや福島の話をする事で福島の良さを伝え、福島県の風評被害の払拭へと繋がっている。

取組内容・実績

6月～2月末 ボランティア総数(のべ)806名
(福島県内57%、福島県外から43%)

「芋煮会de動物コン」

平成28年11月3日(祝) 参加人数：30名

動物が好きという同じ思いをもった同士の心の交流を目的として、福島の子の風物詩「芋煮会」を活用した交流事業を開催した。



関東地方へのブース出展

震災後から続けている関東方面でのブース出展活動。福島への理解を深めてもらうとともに、パネルなどを用いて実際の体験に基づいた動物防災について啓蒙活動を行った。

出展数：全54回 中目黒村マルシェ(目黒区)30回・なかのアンテナストリート(中野区)3回・川越譲渡会(埼玉県川越市)15回

他、航空祭2016(山梨)、赤毛のアンミュージカル(山梨・静岡)、新宿ベルク写真展など。



仮設住宅への被災動物アンケート実施

震災時の同行避難についての実態調査が必要だと考え仮設住宅への協力を依頼し実施した。

アンケート総数：4仮設住宅・47件

事業の成果

勉強会では、継続参加者が大部分となり、知識が深まり理解していく様子が見えてきた。それは、防災意識や地域猫活動など、いままで行動できなかった人が、知識を手に入れることで一歩前に踏み出したという事例もあった。また、勉強会の告知をすることで、SORAの活動が広く伝わった。第5回目の定員150名の席を空けることがなく開催できたのはその賜物であると考えられる。被災動物という観点から、どのようにして被災動物が生まれたのか、どうしたら被災動物が生まれないのかをはじめとして、手放さざるをえなかった当時の沿岸部被災者の行動や、悲しい気持ちも知ることができた。ボランティアでは今年度は昨年度の約600名をオーバーする人数の約800名を迎えることができ、福島県民と県外ボランティアの交流がはかれた。

今後の展開

勉強会の開催

次年度もノウハウと講師に来ていただいた方々とのつながりを活かし、勉強会を継続して行う。(大和田新氏、太田匡彦氏、細川敦史氏、後藤啓寿氏、伊藤達也氏、杉本彩氏。次年度案として、堀潤氏 など)

ラジオ番組での啓蒙活動

広く知ってもらうためにラジオ番組を持ち、災害時の活動等を伝える。

キャンドルナイトの実施

来訪したボランティアへ福島県の被災動物・被災者へのメッセージキャンドルを書いてもらい、平成30年3月11日にシェルターでキャンドルを灯す。

写真展の開催

人と動物との絆や、シェルターでの交流などを撮った写真を掲示する写真展の開催。(福島・関東方面)



子ども支援団体組織力強化を通じた野外活動プロジェクト

子どもが自然と遊ぶ楽校ネット

活動地域

福島県内全域

活動分野

社会教育、環境保全、
子どもの健全育成

団体概要

〒965-0871 福島県会津若松市栄町2-14
レオクラブガーデンスクエア5階
TEL 0242-85-6795 FAX 0242-85-6863
E-mail info@kodomo-gakkounet.com
URL <https://www.kodomo-gakkounet.com/>

課題・背景

1. 肥満、運動不足傾向がある子どもが、自然の中で遊ぶことを通じて体力や相互の人間関係づくりをはかっていく。
2. 学校外の学びである私たちの活動を通じて、学校外の居場所(自然の中で)づくりを行い、子どもに応じた学校外の学びの場を通じて、子どもの社会参画をすすめていく。その結果、未来の「ふくしま」の担い手を育成する。
3. 子どもの健康や社会参画人間関係の再構築をはかりながら、公教育と連携した学びの場づくりをすすめていき、子どもの課題解決の場を増やし、震災後、居場所を失った子どもの自己肯定感を高める。
4. NPO法人8団体で構成する「子どもが自然と遊ぶ楽校ネット」が事業を通じて、協働での「組織力の強化」、「公教育との連携」、「事業実施モニタリング」を行うことで、事業全体の訴求力を高めて、8団体全体で子どもへの支援力の向上をはかる。その結果、子どもの基礎体力や自己肯定感が向上し、いじめ件数の減少、子どもの人間関係再構築をはかる。

目的

放射能被害の影響により、外で遊ぶことができなかつた、ふくしまの子どもたちが、学校外の学びの場で自然体験等を通じて他者との協調性や学びを身につけるために、NPO法人8団体で構成する「子どもが自然と遊ぶ楽校ネット」が本事業を通じて、8団体協働での「組織力の強化」、「公教育との連携」、「事業実施モニタリング」を行うことで、事業のプログラムの質と、子ども支援力の向上をはかる。

公教育連携を強化するとともに、事業報告会を開催し、学校関係機関へ波及効果が高まるよう努めたい。

また、次年度以降協議会として事業が継続できるようなファンドレイズを行いながら、学校と民間教育の連携のもとに、一貫した子どもの支援の民間での体制をつくることことができる。

取組内容・実績

11月12日(土)～13日(日) ぼんた山 週末お泊まりプログラム

会場：鯉川村 あぶくまエヌエスネット敷地内

参加者：9名

対象：福島県内の小学1～小学6年生

参加費：3,000円

事業内容：

福島県内在住の小学生を対象に、自然豊かな里山の環境での自由遊びや、ウォールクライミング プロジェクトアドベンチャーなどの野外活動のほか、薪割り、火起こし、食事作り、家畜の世話などを協力して営む体験をとおして、原発事故の影響で外遊びが困難な子どもたちの心身のバランスを保つとともに、社会性、想像力、少しの我慢の力などの生き抜く力を育むもの。



8月11日(木)～17日(水) スキーキッズキャンプ

会場：こめらの森・南会津

参加者：15名

取組内容・実績

対象：妊婦(胎児)、乳幼児、小学生、中学生、高校生とご家族

参加費：23,000円(6泊7日)、11,500円(3泊4日)

事業内容：

ドラム缶風呂／ヒミツ基地作り／流し素麺／竹の水鉄砲づくり／川遊び／薪割り／夕食作り／キャンプファイヤー／火おこし(古代発火法の錐揉式)／ふりかえり



12月25日(日)～28日(水) 自遊学キャンプ 冬

会場：にしあいづ自遊楽校(新郷地区 古民家)

参加者：23名

対象：福島県内の小学1～小学6年生

参加費：18,500円

事業内容：

自遊学キャンプは、参加した子どもたちみんなで遊びを作っていくキャンプである。遊びも食事も、みんなで相談しながら決めていく。みんなで考えて・みんなで決めた・自由な遊びを行う。学校とは違う仲間と一緒にキャンプを行う。一緒に活動し、お互いに助け・助けられることを経験しながら、仲間を作り・お互いの関係を深めて、自分たちだけの居場所を作っていく。

事業の成果

- ・本事業は参加者の体力維持や体力増進に寄与し、豊かな自然環境の中で野外活動をすることで、自然を身近に感じたり、不思議さを発見したり、子どもたちの健全育成に必要な「つながり」意識を醸成することができた。
- ・開催地域においては、山間の小さな集落であり少子高齢化が著しいなか、本事業の開催で地域に子どもの声や活力が広がることで、地域活性化の一助になると思われる。
- ・プログラム期間中、和やかであたたかい雰囲気の間となったことで、参加した子どもに、他者と共に過ごすことの楽しさや心地よさを伝えられた。また、子どもたちの自主的な遊びや発想が生かされ、初めて出逢うお互いの気持ちや夢と一緒に実現していく姿勢やコミュニケーションが観られた。その結果として、いくつもの遊具を自分たちで産み出し、さらに進化させたり、遊びそのものを新しく考えたりすることができた。今後の人生を豊かにしていく上で、役立つ体験となった。
- ・親子プログラムでは、保護者は工作やクライミング、川遊び等の活動に夢中に取り組んでいる様子が見られ、保護者にとっても、日常の忙しさから離れ、リラックスして楽しめる活動になったと考えられる。さらに、こうして家族でゆっくり過ごす時間は、家族の信頼関係を構築する大切な機会であり、そのような場を提供できたことは有意義だったと思われる。
- ・高学年の参加者が多いプログラムでは、食事の配膳や食事作り等でスタッフのサポートを頼む場面が多かったが、みんな快く気持ちよく動いてくれた。低学年や中学年の子どもの行動を見ており、真似しようとする場面がたくさん見られた。このことから、生活の色々な仕事をみんなで助け合って、ひとつの暮らしを作り上げる意識、それを楽しむ意識が育まれたと思われる。
- ・低学年の参加者が多いプログラムでは、のびのびと遊びに集中した回となり、学校や幼稚園以外で初めて家族と離れて宿泊する子どもも多かった。ひとりひとりが、親と離れての新しい体験に楽しみながらチャレンジすることができ、活動を経る中で、自立の力、自律の力や、自信が育まれているのが感じられた。
- ・複数回プログラムに参加している子どもは、新規参加者に教えたり、自分から進んで手伝いをしたりと、先輩としての自覚を持った振る舞いが多くみられ、繰り返し参加する中で、状況を判断して自分で考えて動く力が養われていると思われる。
- ・一部のプログラムでは、外国人ボランティアの参加があり、外国の言葉に触れたり、日本人ではない人と親しく時間を過ごしたことで、参加した子どもたちには多様な物事や人、文化などを受け入れ、楽しむ心が育まれたと思われる。

今後の展開

1. 今後、数年先まで続くふくしまの子ども支援を継続できるように、組織力の強化、ファンドレイズの仕組化を行う。
2. ふくしまの子ども支援を担う若手人材の育成。(ボランティアを含む)
3. 会津、中通り、浜通りでの公教育連携事業をさらに強化。公教育とのノウハウの共有。
4. 原発事故による県外避難者を含む、県内外の子ども同士が、ふくしまで交流できるプログラムを実施。保護者の安心、安全意識の向上。
5. 子どもの権利学習を高め、いじめの防止等への教育を強める。



津波被災を伝承するための記憶と記録整理保存事業

特定非営利活動法人 勿来まちづくりサポートセンター

活動地域

いわき市勿来地区

活動分野

保健医療福祉、社会教育、まちづくり、観光振興、文化芸術スポーツ、環境保全、災害救援、地域安全、人権平和、国際協力、男女共同、子どもの健全育成、情報化、科学技術、経済活性化、職業能力雇用、連絡助言援助、その他

団体概要

〒974-8223 福島県いわき市佐糠町東一丁目19-5
TEL 0246-63-5055 FAX 0246-63-5056
E-mail nakoso@silver.ocn.ne.jp
URL <http://nakoso.net/>

課題・背景

被災者の中には高齢者や心の傷が癒えない人が多く証言を収集するのが難しい時期でもあった。証言を収集した2013年はまだ生活再建も決まらない時期であり精神的に不安定な状況であったこと。

目的

東日本大震災の貴重な体験を後世に遺し将来の地域防災教育に役立ててもらうことが目的。

取組内容・実績

被災者証言の収集・整理



取組内容・実績



自宅訪問での証言収集にNHKの取材

毎月定例開催している被災3区長会議の様子

議題：震災記録誌について



事業の成果

毎月開催する被災3区長会議では被災した全世帯に震災記録誌を配布することを報告しており、各区長からはぜひお願いしたいとの要望があった。

完成前から国際交流基金の関係者やオーストラリア・タウンズビル市の民間交流使等から震災記録誌を欲しいとの要望がある。また、昨年訪問し当時の当会の資料を展示しているハワイ島ヒロ太平洋津波博物館にも新しい資料として展示してもらいたいと考えている。

今後の展開

現在、交流のある海外の都市や施設から英語に翻訳した震災記録誌が欲しいとの要望がある。それについては現在検討中。

当会が行っている被災者支援やサロン・なこそその希望プロジェクト事業等を通して被災者の皆さんが元気になる社会との交流を深めることが出来る活動を提供したいと考えている。



復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」

学校法人山口学園 ECC国際外語専門学校

活動地域 大阪

活動分野 社会教育

団体概要

〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-1-6
TEL 06-6311-1446 FAX 06-6311-1440
E-mail yaraya@ecc.ac.jp
URL <http://kokusai.ecc.ac.jp/>

課題・背景

取り組みをはじめた背景

東日本大震災発生時に、学生の「僕たちに何かできることはありませんか?」という言葉から、在学中に得た学びを活かして福島県の力になれることを考えたことがきっかけ。

課題

福島県を実際に訪れ、風評や風化が今後の課題と知り、風評ではなく、自分達の五感で確かめた「ふくしまの魅力」と「ふくしまの今」を発信すること。

目的

- ・ 福島県の現状把握と正確な情報発信により、風評・風化防止に取り組む。
- ・ 若者の情報発信力で、同世代に正しい理解と「安心・安全」をPRする。
- ・ 在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かす。

取組内容・実績

福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」の開催

ホテルコース2年生が、在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かし、2日間限定のチャリティカフェを運営。カフェ内には、復興支援展示ブースを設け、福島県視察を通し、学生が五感で感じた福島県の現状を情報発信。本年度は、阪急阪神ホテルズ・ウエシマコーヒーフーズ大阪市北区役所・タレントのなすび氏、他多くの企業・団体様のご支援を頂き、2日間で677名様に来店頂き、売上合計468,300円に上りました。また、当日の募金や物販の売上を含めた合計657,196円は、平成29年2月14日に東北地方太平洋沖地震に対する寄附金として、福島県に寄附いたしました。



取組内容・実績

福島県の「安心・安全」のPR

カフェでは、ふくしまの水を使った「ふくしまコーヒー」をイチオシメニューとして設定。毎日口にする水を利用することで、味の美味しさと安全性をPRできました。

福島県産りんごのキャラメルショコラ

協賛企業の阪急阪神ホテルズのパティシエオリジナルのケーキを販売。安全性をホテル名と共にアピール。

福島県銘産品販売コーナーを設置

カフェ内で、りんごや米など、全8品を販売。試食コーナーもあり、全品完売しました。



若者による情報発信

1. SNSを利用した、情報を発信。
ツイッター・フェイスブックにより情報発信。
Twitter : @RapportCafe
Facebook : ECC Hotel International Café Rapport
2. 地域イベントや福島県大阪事務所の手伝いで情報発信。
 - ・福島区民まつり・都島区民まつりにて、銘産品の販売ヘルプ。
 - ・中之島クラフトビアピクニックにて、「みちのく福島路ビール」の販売ヘルプ。



事業の成果

福島へ実際に足を運び、五感で感じたふくしまの魅力を発信する姿に、多くの人々が心を動かされていたように感じます。関西福島県人会の各所での物産販売協力に出かけましたが、学生達が県産品を販売すると、いつも、人だかりができ、役員の皆様も完売のスピードに驚かされていました。やはり、ふるさとのように福島に愛着を感じ、胸を張って商品を販売する姿には、多くの方に安心と信頼を感じていただけ、風評払拭に繋がったと感じております。また、物産展で扱った商品は、主婦層(子育て世代)をターゲットとしたものが多く、学生(子供世代)の説明に、商品を手に取り、耳を傾けるお客様の姿がとても印象的でした。

今後の展開

本事業を開始以来、運営の形や規模を変えながら、今年で6年目を終えました。回を重ねる毎に、賛同頂ける団体・個人が増えていることが、嬉しい限りです。また、入学生の中には、この企画に携わりたいが為に、本校に入学する学生もあり、関西での注目度も増して参りました。よって、今、活動を終えるという選択肢は、私達にはございません。一回一回の寄附金額は微々たる物ですが、末永く支援を続けたいと思っております。



NPO法人 広野みかんクラブ

活動地域 広野町

活動分野

保健医療福祉、社会教育、
まちづくり、文化芸術スポーツ、
子どもの健全育成

団体概要

〒979-0408 福島県双葉郡広野町中央台1-1
TEL 0240-27-1234 FAX 0240-27-2015
E-mail mikan-club@alpha.ocn.ne.jp
URL <https://www.facebook.com/mikan.club>

課題・背景

避難したことにより、ほぼすべてのスポーツ団体が活動を一時休止もしくは解散となった。帰町を開始するも、指導者や部員の不足により震災以前のような活動が困難となった。

このことで、子供の運動機会が減少し体力の低下や帰町に踏み切れない要因の一つとなっているケースもある。また、スポーツを通じての地域住民のコミュニティの場が不足している。

目的

町内のスポーツ環境を整え、子供から大人まで誰もが気軽に運動できる機会を提供し、地域コミュニティをスポーツの面から再生し、また、避難先で行ってきた活動を、町内でも継続できる環境を整備することで、スポーツによる地域の復興、再生、また、活力あるまちづくりに寄与することを目的とする。

取組内容・実績

定期スポーツ教室の運営

- ・ ティーボール教室
- ・ フットサル教室
- ・ バレーボール教室
- ・ 養生太極拳教室

など8種目の教室を実施

主に子供へのスポーツ環境を提供し運動不足の解消や学校以外での友人作りの場となった。
(年間実施数：約420回/のべ3,000名が参加)



定期スポーツサークルの運営

- ・ バドミントンサークル
- ・ 卓球サークル
- ・ フットサルサークル

の3種目のサークルを実施
スポーツを通じて地域コミュニティの形成の場を提供。
職場の仲間や友人と参加する方が多く、スポーツを通して新たな交友関係が生まれた。

(年間実施数：約90回/のべ520名が参加)

取組内容・実績



クラブチーム活動の運営

- ・少年野球部
- ・少年剣道部
- ・サッカー部
- ・バレーボール部

など11種目のクラブチームを実施

近隣他町村からも様々な種目に加入していただき、地域の枠を越えてチームを編成し日々の練習や各種大会へ出場した。

特に、少年のクラブチームは町内のみでは子供の数が少なく実施できない種目も多く、対象を広げることで活動することができた。

(総部員数：約240名)



スポーツ大会の実施

- ・バレーボール大会
 - ・フットサル大会
 - ・ソフトボール大会
- など7つの大会と

- ・ソサイチリーグの年間リーグを実施

多種多様な競技、部門を実施し職場チームや同級生チームなどが参加。また、近隣他町村からも多くのチーム、選手が参加した。



事業の成果

幅広い世代に多種多様なスポーツの環境を提供することで、運動不足やストレスの解消、健康維持・促進につながった。特に子供においては、震災後、スポーツや外で遊ぶ環境が不十分であったため、運動不足が深刻な課題となっていたが、ほぼ毎日いずれかの事業を行うことで、いつでも参加できる環境を整えることができ、徐々にではあるが運動能力の向上が事業を通して見ることができるようになった。

また、既存の住民と震災以降、新たに居住するようになった住民とのコミュニティの場の確保が難しい中、サークルや大会といった事業の中で交流が生まれ、スポーツを通してのコミュニティ形成、仲間づくりと地域の課題解決にもつながっていている。

今後の展開

帰町する住民がさらに増えていく中、避難先での活動を継続して行える環境づくりが一番の課題である。少年クラブチームの活躍も目立ち、平成29年度からは中学校に新たな部活動が作られることとなり、学校教育機関との更なる連携が必要となる。

また、成人向けの教室が少なく地域住民からの要望も多いことから、更なる新規事業を計画し、子供のみならず若い世代のスポーツ活動の充実も目指していく。

さらに、年間を通して実施するリーグ戦方式の大会事業が好評であり、近隣企業からも多数参加したいという要望もあるため、新規種目の実施も検討している。

スポーツを通しての町の復興、再生、発展を目指し、「スポーツで広野町を元気に!」の言葉通りに活力あるまちづくりに寄与していく。



被災により社会参加が困難な若者が牧場体験を通し、元気と意欲を取り戻し、畜産の担い手となる可能性を探る事業

NPO法人 明日飛子ども自立の里

活動地域

鯨川村

活動分野

子どもの健全育成

団体概要

〒963-8403 福島県東白川郡鯨川村大字赤坂東野字葉貫13-2
TEL 0247-49-3344 FAX 0247-49-3366
E-mail npo@asubi.jp
URL <http://asubi.jp/>

課題・背景

県内には東日本大震災及び原子力災害をきっかけとし、

- ① 社会活動が困難となり、ひきこもりや無職状態にある若者が大勢います。
- ② 畜産農家の担い手が不足しています。傷ついた若者の多くが繊細で優しく、動物と係わる仕事を希望する若者も多くいます。

目的

東日本大震災及び原子力災害により、生活のリズムが狂い傷ついた若者が大勢います。繊細で心優しいために傷ついている方が多く、動物が好きだという若者が多くいます。これらの若者と

- ① 牧場での作業、加工品の開発製造、販売などを体験することにより、仲間ができ、元気に社会活動を行えるきっかけを作ること。
 - ② 牧場の仕事に関心を持ち、家畜の仕事に従事することを考えるきっかけを作ること。
- を目的とします。

取組内容・実績

宿泊牧場体験(酪農)

- ・動物の基礎知識
- ・搾乳作業体験
- ・給餌作業体験
- ・牛舎清掃体験
- ・養鶏作業体験
- ・加工体験
- ・販売体験



取組内容・実績

仲間作り

- ・ 共同生活
- ・ 目標や活動を共有する活動

研修活動

- ・ 畜産農家見学
- ・ 地域連携体験(畜産加工販売見学)
- ・ 地域連携体験(畜産イベント体験)

個別支援

- ・ キャリアコンサルタントによる
就労支援



事業の成果

- ・ 自己肯定感、自己信頼感を持たず、就労しても長続きしない若者が、このプログラムに参加し、本気で酪農体験に取り組み、朝早くからの作業にも休まず参加しました。
その結果、2名の若者が、酪農関係への就労を考えています。
- ・ プログラムに参加することで、自信を取り戻した1名の若者が、就労を果たしました。
- ・ 仲間としてこのプログラムに参加することで、本音で相談したり、力を合わせて解決する体験ができ、若者に明るさと、役に立てる実感、自信がよみがえりました。

今後の展開

- ・ 酪農関係への就労が実現できるよう、酪農体験(搾乳 飼育技術 出産技術)をさらに高度化します。
- ・ チーズ作り等酪農6次化事業を体験することで、酪農の楽しさ、奥深さを体感し、酪農関係への就労を後押しします。



被災地と首都圏を結ぶ復興応援事業

NPO法人 表郷ボランティアネットワーク

活動地域 白河市

活動分野 まちづくり

団体概要

〒961-0416 福島県白河市表郷金山字越堀151-1
TEL 080-5557-7072 FAX 0248-29-8015
E-mail borabora69_omotego@yahoo.co.jp
URL omotego.wixsite.com/omotego

課題・背景

被災地各地域は各々復興をめざして活動しているが、それぞれの現状や情報交換を図ることで、今後の方向性を確認したり活動の励みになることも多い。また被災地の現状、特に福島県の現状については、首都圏に全く伝わっていないため、首都圏のイベントに出向き、現状を伝え風評被害払拭をアピールすることが急務である。

目的

東日本大震災とその後の原発事故から6年、福島県民は引き続き精神的、経済的に大きな影響を受けている。しかし時間の経過と共に全国的には記憶が薄れてきており、まだまだ福島の実状について情報発信が不足していると感じている。そこで、継続してきた復興支援活動を県内外で展開しつつ、より福島の実状をアピールする事業を行う。

取組内容・実績

復興イベントの開催 夏だ!まつりだ!福幸だ!ふれあい夏まつり

平成28年8月28日、白河関の里で開催。富岡町漁協婦人部や首都圏に住む地元出身者にも出店してもらった。ステージは、地域の活動団体を中心に一度復興支援で来てもらったUtaka&Wataruに出演してもらった。復興支援活動写真やブースを作り、県内外から訪れた人々に復興状況を理解してもらい、楽しみながら交流を図り、24時間TV募金にも協力した。



取組内容・実績

かわうち祭り秋の陣

平成28年10月30日参加。被災後、原発事故で白河市表郷地域に避難していた川内村の方々と交流ができ、昨年に引き続き、「かわうち祭り秋の陣 そばフェスタinかわうち」にボランティアとして協力した。会員4名が参加、女川のさんま、川内村のいわな塩焼、かわうちそばガレット、川内村物産品のブースに分かれ、販売等のお手伝いをした。終了後、表郷に避難していたご家族の自宅を訪問、近況を伺った。なお今年オープンした総合商業施設YOTASHIを視察して、帰路についた。

岩槻安穏朝市参加

平成28年11月20日、埼玉県岩槻市で実施している安穏朝市に参加し、福島県の現状を伝え、安心安全な品質であることを直にアピールした。岩槻は初めてだったが、主催者が復興支援活動で交流があり、まわりの住民も好意的だった。お米、トマト等を試食、配布した。



事業の成果

まつりや集いを通して、被災者間の顔の見える関係を築き、交流のある川内村や宮城県南三陸町へ出向くことで、お互いの近況を共有し、首都圏イベントに参加することで、福島県の復興状況を発信、文字通りきずなを各地で深めることができた。行き来をすることが、お互いの関係をよくし、復興に役立つものと期待する。

今後の展開

さらなる復興を遂げるためには、事業を地道に継続していくことが大切なので、引き続き各地との交流を深め、こちらで開催するイベントにも来てもらうような関係づくりをしていく。



音楽療法による復興支援

特定非営利活動法人 音楽療法NPOミュージカトゥッティ

活動地域 福島、伊達、南相馬、会津若松各市

活動分野 保健医療福祉、社会教育、まちづくり、文化芸術スポーツ、人権平和、国際協力、男女共同、子どもの健全育成

団体概要

〒161-0034 東京都新宿区上落合3-15-1-604
TEL・FAX 03-5937-2772
E-mail musicatutti1259@live.jp
URL <http://musicatutti.com>
<http://blog.canpan.info/musicatutti>

課題・背景

2011年8月から、宮城、福島にて音楽療法による震災支援を200回継続してきた。専門職によるメンタルケア支援が少ないなかで、様々な地域分断を実感した。誰もが参加できる形態による、自然で穏やかな共生感、一体感を市民が感じられる場の構築、プログラム化が急務である。

目的

震災後、大人も子どもも自然な感情表出が困難でため込んでいるため、ストレスをかかえており、メンタルケアが急務である。子どもの健やかな成長、親子、家族の良好な連携、高齢者、仮設住宅に居住する被災者などの孤立を防止することも求められている。

音楽療法による支援は、個々に寄り添いながら集団の一体感や高揚感を構築できる。乳幼児親子から高齢者まで異年代の交流を生み出し、地域復興につなげることを目的とする。

取組内容・実績

伊達市梁川小学校講堂にて開催した、地域交流ワークショップ7月18日、コンサート8月20日、セミナー9月25日。地域に開かれた場所で、市教育委員会の後援も受け交流の輪がひろがった。

伊達市とは5月から連携があり、伊達美術館館長から勧められた会場であった。



取組内容・実績



8月8日に福島市内の「学童りんごっこ」でアウトリーチ実施。(瀬上小学校の体育館にて) 2015年3月から連携してきており、児童のメンタルケアのために教頭を退職、学童を開設された理事長とは相互理解ができています。

回を重ねることで児童に自主性や社会性が育ち、良い実践となった。

今回は、小学校の先生方も参加、体験した。

11月8日会津若松市葵高校吹奏楽部でのアウトリーチ。3月20日に、吹奏楽部、合唱部合同の演奏会を葵高校にて実施が決定。市内に大熊町の仮設住宅があるので、その方々や大熊幼稚園、小学校、中学校にも声をかけることを校長先生が提案された。

教育活動と地域がこのように連携できることは大きい。



事業の成果

本事業では、福島市、伊達市、南相馬市、会津若松市と実践が拡大、とりわけ会津若松市においては、葵高校の校長先生の理解があり、地域への拡がりが生まれた。学校教育と地域の連携のモデル事業としての意味深い事業となった。

高校生にとり、震災の様々な問題とメンタルケアとしての音楽を体験することは意義深く、教員にとっても新たな視点が開かれることと期待される。

今後の展開

会津若松市において、5月に高校音楽科教員の研修会をモフラン氏と実施することになっている。本事業の意味を啓発啓蒙できる機会と期待される。

音楽療法による震災支援、社会貢献を評価され、1月27日に世界孔子協会から「孔子仁和賞」が授与された。7月に筑波で開催される「世界音楽療法大会」において、モフラン氏と震災支援実践のワークショップを実施予定である。このように、プログラムの進化と社会認知を同時進行させながら、さらなる社会貢献を展開していきたい。



すかがわ地域交流促進プロジェクト

すかがわ地域交流促進プロジェクト実行委員会

活動地域 須賀川市

活動分野

社会教育、まちづくり、文化芸術
スポーツ、子どもの健全育成、科学
技術、経済活性化

団体概要

〒962-0844 福島県須賀川市東町59-25
TEL 0248-76-2124 FAX 0248-76-2127

課題・背景

震災により中心市街地の市民交流拠点であった総合福祉センターを失ったことが大きな地域課題であり、震災以降、当プロジェクトに取り組むことで多世代間の交流、各団体間の交流を培ってきた。

震災から6年が経過する中で、これまで築かれた絆の維持が今後課題となると考えているところである。

目的

- ・被災した総合福祉センターが担ってきた市民が交流できる拠点をもう一度整備し、多世代間、各団体間の交流を図ることを目的とする。
- ・これまでの交流により培ってきた絆をより大きくより確かなものにし、今後継続できるものとするを目的とする。

取組内容・実績

地域交流館ボタンの運営・寺子屋事業の実施

- ・誰でも利用できる『コミュニティースペース』として開放しつつ、定期的に寺子屋事業・イベントを実施した。
- ・特に当年度は市内在住ピアニストを週3日程度配置することで、高齢者へは音楽を通じたウェルネスプログラムにより外へ出るきっかけを与え、子どもたちへは音楽に触れる場を提供することで感性を磨くきっかけを与えたところである。



寺子屋出張事業 職場体験事業

地域の将来を担う小学生らの参加を募り、企業を訪問して出張事業を開催し、地元企業、事業者への理解と関心を深め、地域への愛着を高めた。

取組内容・実績



- ・水彩カフェ
「Xmasケーキを作ろう」
- ・グランシア須賀川
「結婚式場の仕事を体験しよう」
- ・形幸染物店
「須賀川の伝統工芸染め物「江戸小紋」を学ぼう」

地域交流促進プロジェクト発表会

これまでの当事業で培われた経験や交流を発表する場としてのイベントを松明あかしと同日に同エリアで実施した。

発表会までの寺子屋事業を発表会で活用できる内容とすることで、発表会への準備につながるだけでなく、参加者一人一人が発表会を創り上げるという参画意識の向上と主体性を持った子どもたちの育成につなげた。

発表会に向けた事業

- ・須賀川歴史探検隊①「須賀川と松明あかしの歴史探検」
- ・須賀川歴史探検隊②「松明太鼓を知ろう」
- ・「LEDパネルを作ろう」
- ・「トランスフォームベンチを作ろう」
- ・「ランプシェードを作ろう」



発表会

- ・すかがわとみんなのきずな出張寺子屋事業(ミニ松明制作体験や子どもたちによるおもてなし隊)

事業の成果

- ・『地域交流館ボタン』の運営、『寺子屋事業』などの実施により、高齢者層から若年層間の「連携や繋がりが、絆」が生まれ、地域コミュニティの醸成に繋がった。
- ・『発表会』により、これまで『交流館ボタン』を利用していた方以外への情報発信になり、市民への当施設や事業への理解が深まった。
- ・これまでは寺子屋事業に「参加」する立場であった子どもたちが『発表会』というイベントを作り上げる側に一部としてでも関わったことで、より地元への帰属意識が生まれるとともに、主体性を持った子どもたちの育成に寄与できたと感じている。

今後の展開

本年事業ではこれまで当事業で培われた交流・経験をもとに「発表会」という大きな展開をしたところである。今後は継続的に交流の場・学びの場を提供することで、より世代間、団体間の交流を深めるとともに、より須賀川への愛着を持った子どもたちの育成に取り組んでいきたい。また本年の「発表会」のように新たな展開を進め、当事業そのものだけでなく、当事業で培われたことが地域内において波及効果を生むよう取り組んでいきたい。



中之作地域 町並み保存活動

NPO法人 中之作プロジェクト

活動地域 いわき市

活動分野 まちづくり、地域安全

団体概要

〒970-0313 福島県いわき市中之作字川岸10
TEL 0246-55-8177 FAX 0246-55-8178
E-mail nakanosakuproject@gmail.com
URL <http://nakanosaku.xsrv.jp>

課題・背景

いわき市中之作は、東日本大震災と津波による被害を受けましたが、地形など様々な要因により奇跡的に多くの建物が残された港町です。しかし、少子化・高齢化・核家族化・過疎化などの社会問題により、港町の風景をつくる貴重な建物は修復されずに次々と壊されてしまいました。震災に耐えた貴重な港町の風景を次の世代に伝えるため、地域コミュニティの再構築と、地域に若い移住者を増やす取組が地域課題です。

目的

核家族化・過疎化・少子高齢化などによる空き家問題の解決が当面の課題です。地域の空き家に若い入居者を迎えるためには、空き家所有者の意識改革が重要です。被災建物を修復し定期的に地域おこしイベントを開催し、空き家を再生して地域に若い入居者が増える取組を続けることで、地域の空き家再生事業が軌道に乗ることを期待しています。

取組内容・実績

空き家を活用したコミュニティカフェづくり事業

高台で15年以上放置された空き家を住民参加のDIY教室を実施しながら修復。

「草刈り」「材料運び」「コンクリート土間打設」「外壁下地張り」などを実施しました。建物までの道路がないため、資材の運搬やゴミの運び出しなどは大勢の参加者とともにバケツリレーを行いました。

DIY教室は再生作業に積極的に関わる移住希望者とのコミュニケーションの場としても機能しました。



取組内容・実績



空き家バンク設立準備事業

参加人数：5名

中之作の空き家に興味があり、まちづくりや地域コミュニティに積極的に関わってくれる移住希望者を募集しました。DIY教室などに参加する方や、レンタル古民家「清航館」の利用者などに声をかけました。

これまで約5回移住希望者を対象にした町歩きを実施しました。

もち米づくり体験と餅つき大会の開催

参加人数：田んぼ20人×3回+餅つき200人
=260人

もち米を住民参加により全て手作業で育てました。年末にはカマドで蒸かしたもち米を清航館の庭先で杵と臼で餅にし、地域住民に振る舞いました。

稲刈り、脱穀には地元の学童保育団体の協力で、たくさんの親子参加がありました。



事業の成果

事業を通じて、地域に興味を持つ方が増えました。地域の課題についても、事業を通じて地域の方と再認識出来たように感じます。中之作に住みたいという方の問合せも徐々に増えてきましたが、移住にまでは至っていない状況です。

空き家を活用したコミュニティカフェづくりは、コンクリート土間づくり教室などを7回開催。延べ約150名が参加しました。当初予定よりも工程が遅れていますが、少しずつ完成が見えてきたように思います。

今後の展開

空き家修復作業で利用可能となった建物は、地元の主婦（震災後機能していない漁協婦人部など）を巻き込んだコミュニティカフェに整備したいと考えています。子育てママ向けの片手で食べられる「サンドイッチ」や、カフェインが少ない「飲み物」を主体に運営することをイメージしています。

【ものづくり】を楽しめる人が地域に一定数いると、それがライフスタイルとして定着すると考えています。空き家再生に関連する作業だけでなく、料理・陶芸・書道・アクセサリー・写真・グラフィック・サイトデザインも【ものづくり】の範囲内であり、嗅覚が鋭い彼らは楽しそうに作業をしていると自然に集まってきます。そんな方々に「この地域で暮らしてみたい」と思わせるのが、空き家修復の目標です。

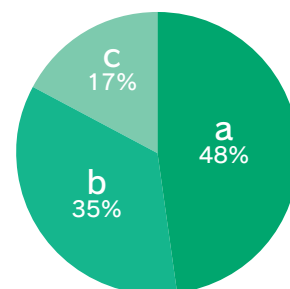
次年度は、空き家バンク設立に向けて本格的に動き出す予定です。

平成28年度ふるさと・きずな維持・再生支援事業 アンケート調査結果

実施団体数：23団体

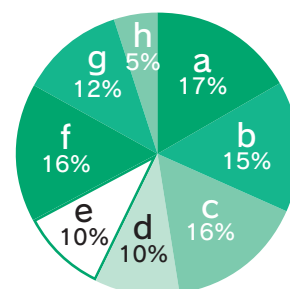
1 ふるさと・きずな維持・再生支援事業(以下「きずな事業」という)はどのような活動を展開したのですか？

a. 今までの活動の一部内容を発展させたもの	47.8%
b. 今までの活動の範囲を拡大したもの	34.8%
c. 新しい活動として取り組んだもの	17.4%
d. 他団体の既存活動を継承したもの	0.0%
e. その他	0.0%



2 きずな事業ではどのような団体と連携しましたか？(複数回答可)

a. 行政	16.9%
b. NPO法人	14.6%
c. 任意団体(ボランティア、地縁組織等)	15.7%
d. 公益法人(財団法人、社団法人等)	10.1%
e. 経済団体(商工会、商工会議所等)	10.1%
f. 企業	15.7%
g. 教育機関(大学等)	12.4%
h. その他	4.5%

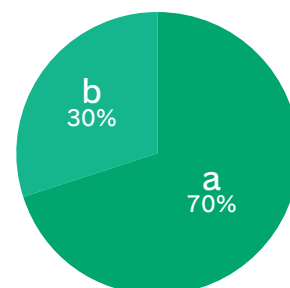


その他意見

- ・ 農家
- ・ 宗教団体等
- ・ 農業法人、行政機関(ミデツテ)
- ・ 酪農協

3 きずな事業では他の団体と上手く連携することはできましたか？

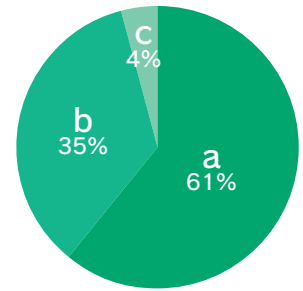
a. 各主体の特性を十分に生かすことができた	69.6%
b. 各主体の特性をある程度生かすことができた	30.4%
c. 各主体の特性をほとんど生かすことができなかった	0.0%
d. その他	0.0%



4

きずな事業では地域住民の理解は得られましたか？

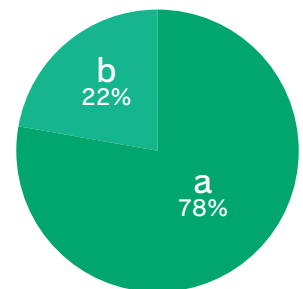
a. 十分に理解や共感が得られた、又は、多くの参加もあった	60.9%
b. ある程度の理解が得られた、又は、一部の参加もみられた	34.8%
c. 一定の理解が得られた	4.3%
d. あまり理解は得られなかった	0.0%
e. その他	0.0%



5

きずな事業で実施した取組について、目標は達成できましたか？

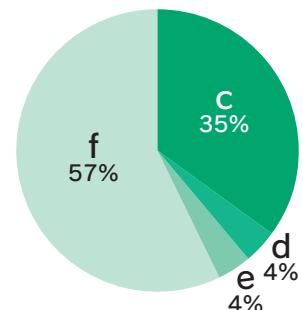
a. 概ね目標を達成できた	78.3%
b. 目標の7～8割程度は達成できた	21.7%
c. 目標の半分程度は達成できた	0.0%
d. 目標の一部を達成できなかった	0.0%
e. その他	0.0%



6

きずな事業で実施した取組について、改善すべき点がありましたか？

a. 地域のニーズに合致していなかった	0.0%
b. 関係機関の協力が得られなかった	0.0%
c. 事業期間が足りなかった	34.8%
d. 需要が大きくカバーしきれなかった	4.3%
e. 当初の事業計画、実施体制に無理があった	4.3%
f. その他	56.5%



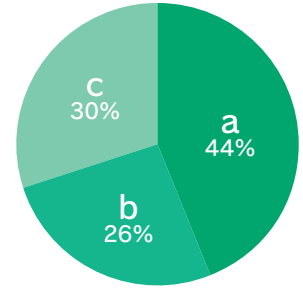
その他意見

- ・ イベント実施時期を再検討すること
- ・ 人員確保
- ・ 地域住民を更に巻き込んだ取組にしたい
- ・ 宿の理解をもって進めるため、丁寧な説明をしなくてはいけない
- ・ 物語を外国語に翻訳できなかった
- ・ 事業期間は短かったものの、今後の展開につながるような事業を行うことができた。
今年度事業に関しては計画通り実施することができた
- ・ 行政との連携が取れなかった
- ・ 予想より集客が増え、待ち時間が多くお客様をお待たせしてしまった
- ・ 秋に行事が多く、忙しかった
- ・ 改善すべき点は特になかった

7

きずな事業終了後、その取組については継続しますか？

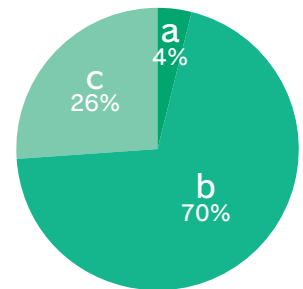
a. 事業を拡大して継続する	43.5%
b. 同様の取組を継続する	26.1%
c. 一部手法や内容を変更して継続する	30.4%
d. 継続しない	0.0%
e. その他	0.0%



8

きずな事業の取組の継続について、資金調達の予定はどうか？

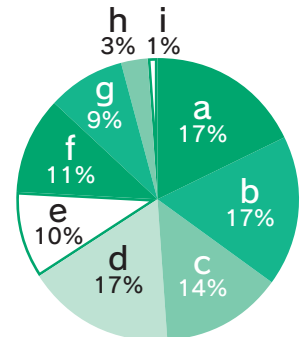
a. 必要な資金はほぼ調達可能である	4.3%
b. 必要な資金の一部は調達可能である	69.6%
c. 必要な資金の調達の目途は立っていない	26.1%
d. その他	0.0%



9

きずな事業の取組の継続・発展に必要なものは何ですか？(複数回答可)

a. 事業に協力してくれる人材の確保・育成	17.2%
b. 行政による側面支援	17.2%
c. 他の主体(地域住民、NPO、企業等)との協力・連携	14.1%
d. 補助金・助成金の充実	17.2%
e. 会費・寄付の増加	10.1%
f. 自主事業の拡大	11.1%
g. 地域資源の活用	9.1%
h. 専門的知見やノウハウの取得	3.0%
i. その他	1.0%



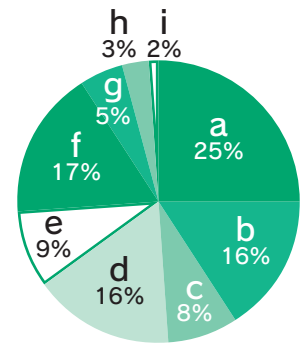
その他意見

- ・ 大学との連携

10

きずな事業を実施した成果として何が挙げられますか？(複数回答可)

a. 様々な団体とのネットワークができた	25.0%
b. 地域課題に取り組む人材が育った	15.6%
c. 専門的なノウハウ等が習得できた	7.8%
d. 効果的な事業立案・実施が可能となった	15.6%
e. 住民主体の活動につながった	9.4%
f. 地域資源を活用することができた	17.2%
g. 新たな起業や雇用の創出につながった	4.7%
h. その他	3.1%
i. 無回答	1.6%



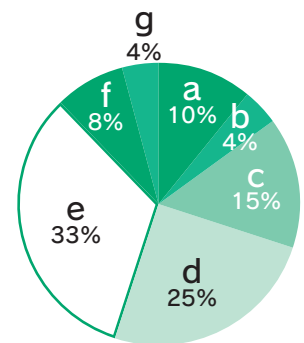
その他意見

- ・若者が本気で活動に参画してくれ、次世代につなげることができそうである
- ・学生の自尊感情を育成する機会を得た

11

きずな事業を実施後、団体組織として変化したことはありますか？(複数回答可)

a. 会員数が増えた	10.4%
b. 寄付が増えた	4.2%
c. スタッフが増えた	14.6%
d. 支援者が増えた	25.0%
e. 団体の知名度が高まった	33.3%
f. その他	8.3%
g. 無回答	4.2%



その他意見

- ・福島素材の理解が深まり、活用が進んだ
- ・ネットワーク拡大、スタッフのスキル向上
- ・短期間で多くの皆様にお越しいただくことができた

きずな事業の実施において、特に苦労した点は何ですか？（自由記載）

- ◆ 3月の帰村を控え、飯舘村の家屋の解体が進み、「古いモノ」の収集が以前より大変になった。
- ◆ 東京発着の農業体験バスツアーを実施しましたが、参加者募集において首都圏で情報を発信する術が少なく、集客に苦労しました。
- ◆ 事業開始時期が、6月頃だと体制を整え具体的なアクションに入る際、他団体や企業などは既に予定が決まってしまうっており、連携が難しい。
- ◆ 南相馬市小高区は避難解除準備区域から解除され、昨年7月には常磐線小高駅も開業した。それに伴い地域住民の帰還意識が高まり、復興支援活動のニーズが多くなった。
- ◆ ボランティア数がもう少し多ければと案件の消化に苦労している。
- ◆ 取組にあたって地域住民の協力を得る事。
- ◆ 東京での料理教室の調整が難しかった。
- ◆ NPO法人の理事を通して、たくさんの交流が生まれたが、その中でより個人対団体の信頼関係を作ることの大変さを実感した。
- ◆ スタッフが増えた事による各員のモチベーションの維持。
- ◆ 3.11当日の事実を掘り起こす事。インタビューにより色々な方に確認したが、それぞれ少しずつ事実と思われることがずれていた。このすり合わせ。
- ◆ この物語の将来像に当事者の福島大学の支援が必須であり、その調整が遅れている。
- ◆ 予算管理と報告業務。
- ◆ フラガールのふるさといわき推進事業、第1弾「いわきフラウィーク」第2弾「フラの道構想」第3弾「全国学生フラ・フェスティバル」と1年間を通して3つのイベントを開催しましたが、第1弾・第2弾は開催規模が小さかったのですが、まだまだ企画を密に検討して進めることが必要と感じました。
- ◆ 震災記録紙編集には専門的な技術と編集能力が必要であり、その対応について苦慮していたが、当会の関係者でその経験を持っているメンバーがいたことで事業がスムーズに進めることが出来た。
- ◆ 特に無し。大変有意義に活動できました。また、視察に来ていただいたことで、励みになりました。
- ◆ 地域住民のニーズの把握。
- ◆ 事業の周知（特に立地企業や近隣他町村への）。
- ◆ 参加者の確保。
- ◆ 既存団体との連携（方向性の違いなど）。
- ◆ 宿泊型の牧場体験と言う、若者にとって初めての経験であることに、安心して参加を決断できるよう、サポートやプッシュの仕方に苦労しました。
- ◆ 他にも多方面にわたり事業を行なっているのと、会員がそれぞれに別の活動もしているため、秋のスケジュールが重なることが多く、首都圏イベントの参加者が少なくなった。
- ◆ チラシを作成、地域の行政などと連携し広報に努めたが、知らないこと、知らない人に近寄らない気風に、苦労した→集客の困難さ。
- ◆ 今年に関しては、新しい取り組みを増やしたこともあり、実際に事業を実施するまでの企画段階での苦労がとてもしばしばあった。

復興支援・被災者支援活動において、現在、特に課題となっていることは何ですか？ (自由記載)

- ◆ 飯舘村は帰村により「帰る人」「帰らない人」「帰れない人」という新たな分断が生まれるので、コミュニティ維持のための機会を増やす事業の企画と、それぞれの立場にたつての支援が課題となっている。
- ◆ 年度で活動費に切れ目ができてしまうと、活動の継続に多大な負担が生じる。
- ◆ 県外においても県内においても、被災者や被災地における実情に対して、周囲とのギャップがある(既に復興は終わっているかのように思われていると感じる)。
- ◆ 当団体のある小高区は交通機関の便が悪く、ボランティアはもとよりスタッフの通勤も困難である。優良なスタッフの確保が難しく、運営上の問題で苦慮している。
- ◆ 地域課題に取り組む人材が不足している。
- ◆ 料理人の県産食材への理解。福島県の検査体制の理解に差があり、説明しながら地産地消をする必要がある。
- ◆ 子育ての環境をよくすること。(例：地域で地域の子どもを育てる意識)
- ◆ 官民と役割分担の中で観光振興などの事業に民間の立場で取り組んでいるが、自己財源に乏しく、また、短期間で成果が現れ、目的を達成できる事業ではない為、補助金、助成金などに頼っている面が大きい。息の長い経済的支援を期待しています。
- ◆ 現在、震災から6年が経過して今は首都圏やその他県外の人たちから東日本大震災の意識が薄れつつあります。しかしいまだに仮設住宅に身を置いている避難者の方々が多くいることを、私たちは発信し続けることが大事と考えています。
交流人口を増やし、この地方の現状を正しく知っていただくために、いろいろなイベントを通してその機会作りになればと行動しています。
- ◆ 津波被災者と原発避難者との環境や状況に変化が生じていること。
- ◆ メディアの注目度が落ちていて、風化を感じます。本年6回目の開催で、協賛企業の大きさや規模そのものも大きくなったにも関わらず、ニュースリリースに反応した媒体は1社でした。来年は、更に、発信を増やしたい。
- ◆ 復興支援活動を行っている各団体との連携。
- ◆ 震災原発事故による傷が深く、参加を検討しながら、参加を決断できない若者も大勢いました。また勇気を持ってやっとの思いで参加した若者もいました。彼らの努力が報われるよう、丁寧な対応を続けたいと思います。
- ◆ 将来的には自主事業や寄付を増やして、事業が行えるような態勢にしたいが、公益性と経営の両立は難しく、すぐには実現できないのが現状である。また非営利でも認定でない法人には課税されるため、なお運営が大変である。認定を受けるにも事務量や人手不足、条件が厳しいなど、非営利法人の法的な支援の不足を感じる。資金的に自立には至らないが、活動が認められている団体については支援していただくと事業を継続しやすい。
- ◆ 空き家バンク設立に向けて、空き家所有者に呼び掛けているものの、なかなかいい返事が来ない。

平成28年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
活動成果報告書

平成29年3月31日発行

発行 福島県企画調整部文化スポーツ局 文化振興課
〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16 (県庁西庁舎11階)
電話 024-521-7179 FAX 024-521-5677

運営受託 認定特定非営利活動法人 ふくしまNPOネットワークセンター

事務局 ふくしま地域活動団体サポートセンター
〒960-8043 福島県福島市中町8-2 福島県自治会館7階
電話 024-521-7333 FAX 024-521-2741

